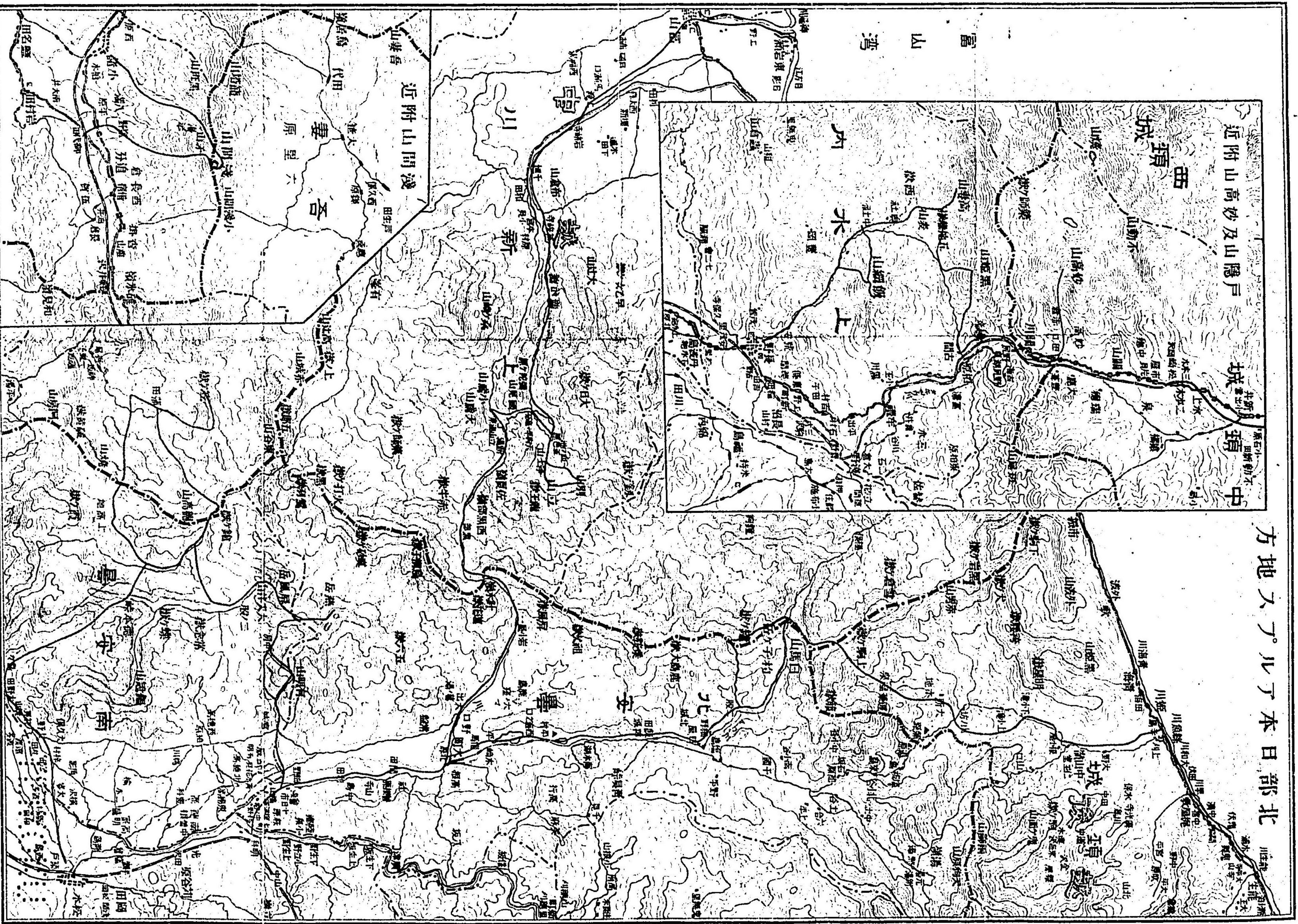


方地スプア日本日部北



Scale bar markings: 1, 0, 1, 2, 3

Scale bar markings: 1, 0, 1, 2, 3

Scale bar markings: 1, 0, 1, 2, 3

Scale bar markings: 1, 0, 1, 2, 3

Scale bar markings: 1, 0, 1, 2, 3

富山湾

近附山高妙及山隠戸
城瑯西
城瑯中
城瑯東

内水

近附山間淺

川新

豊安南

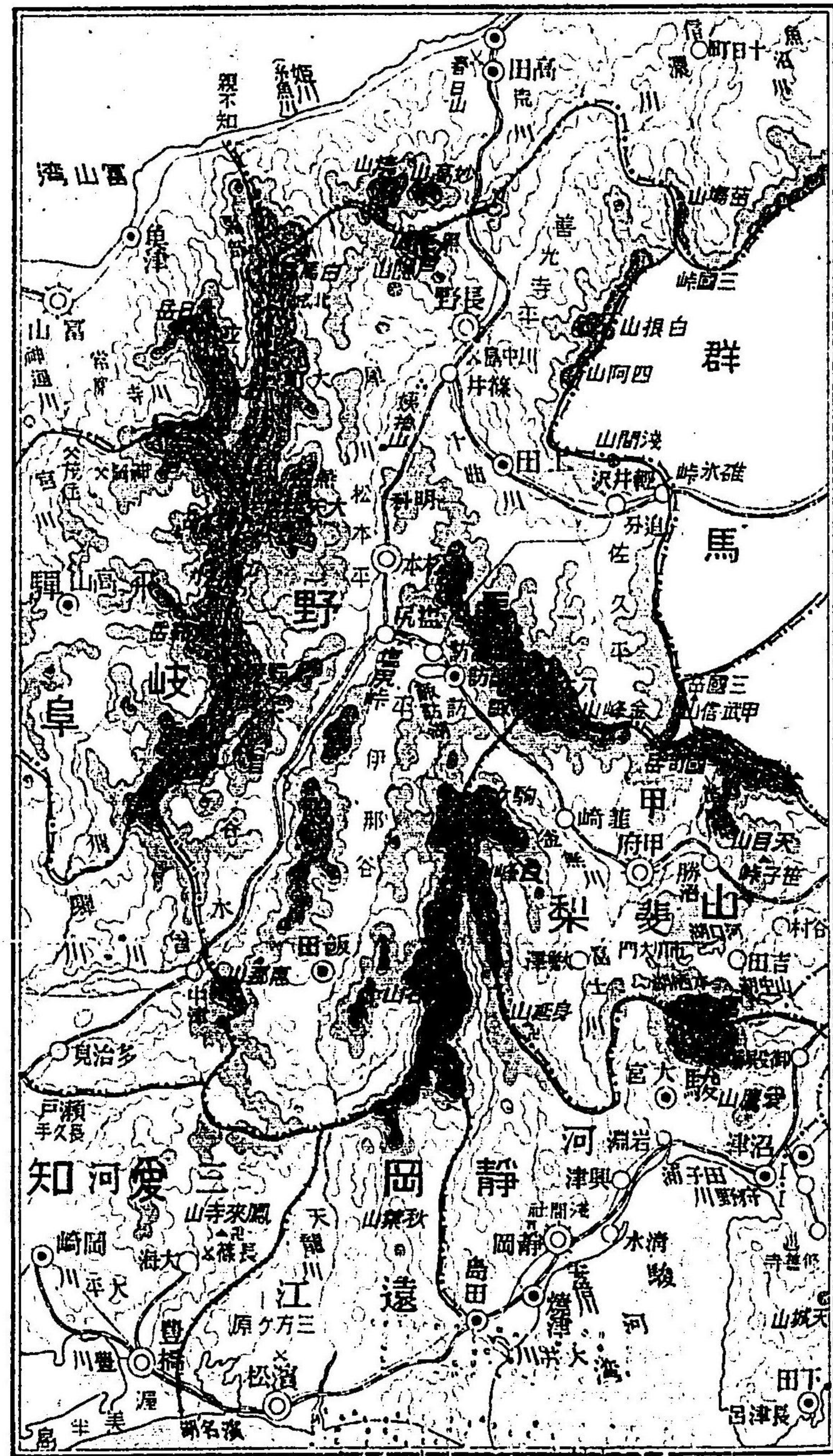
豊安北

城瑯中

城瑯東

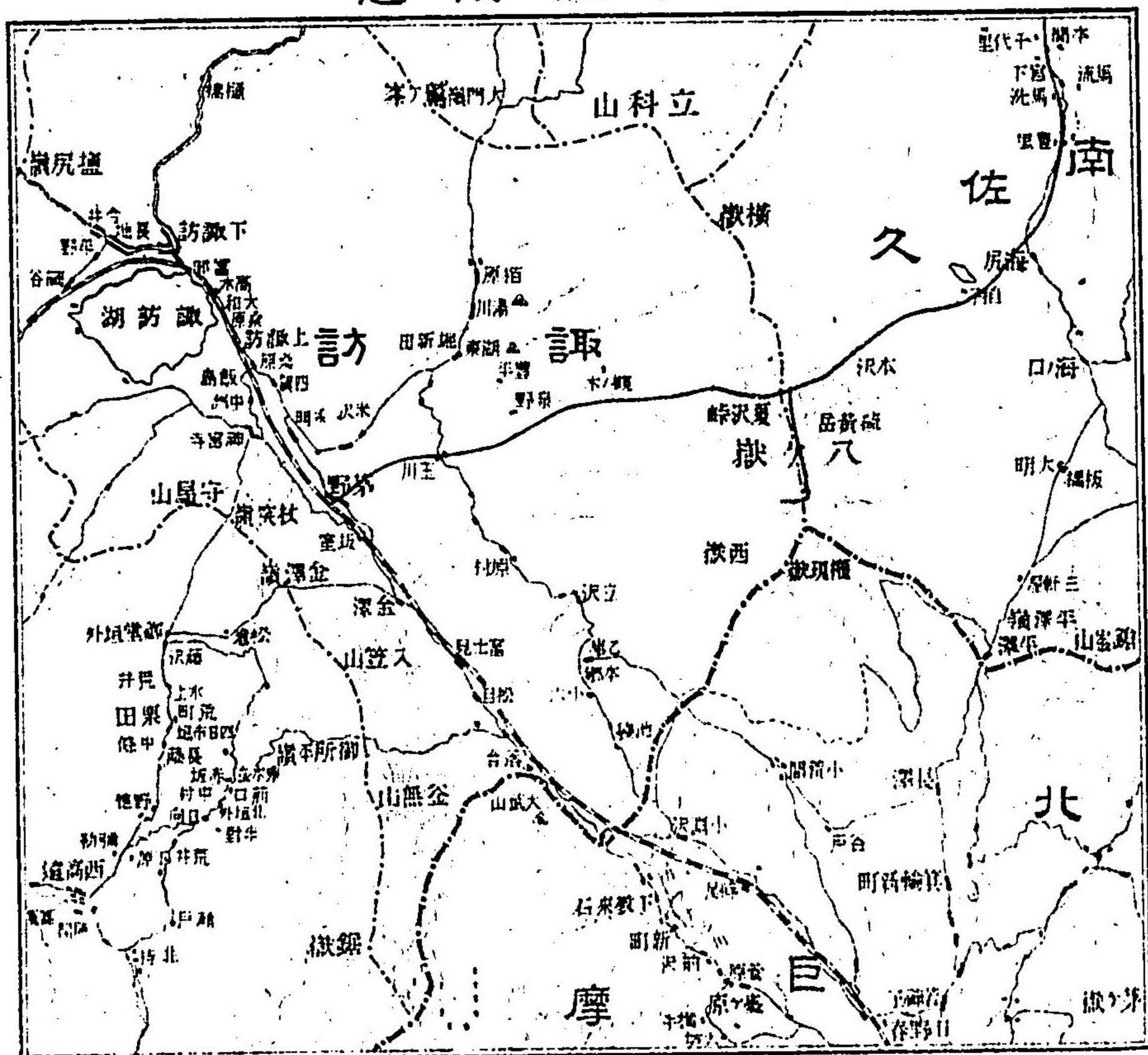
城瑯西

方地スプルア本日



Suganuma

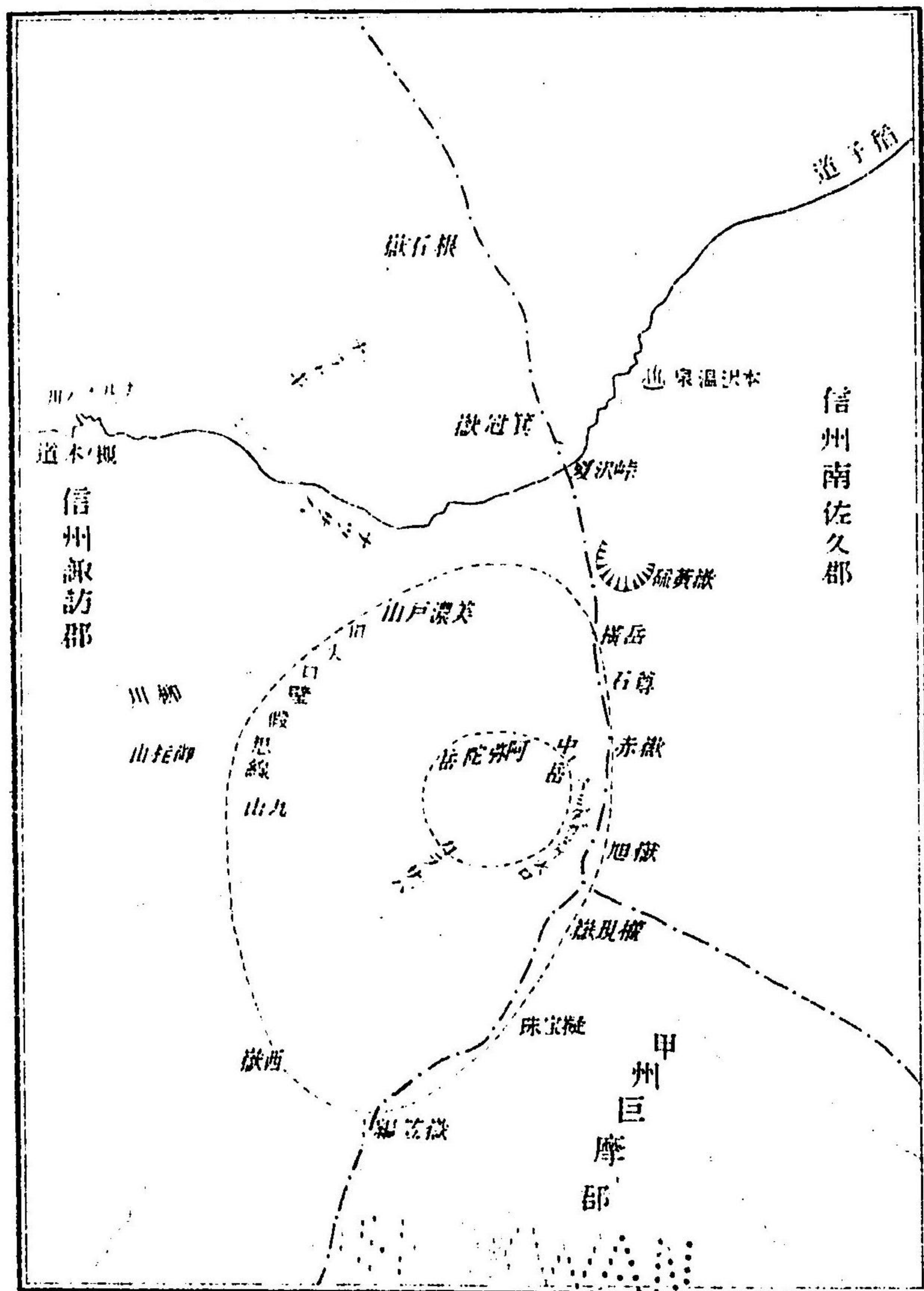
八ヶ岳附近



10km 1:140,000 高距離毎百米

POINT
MAP/NO.301
07107

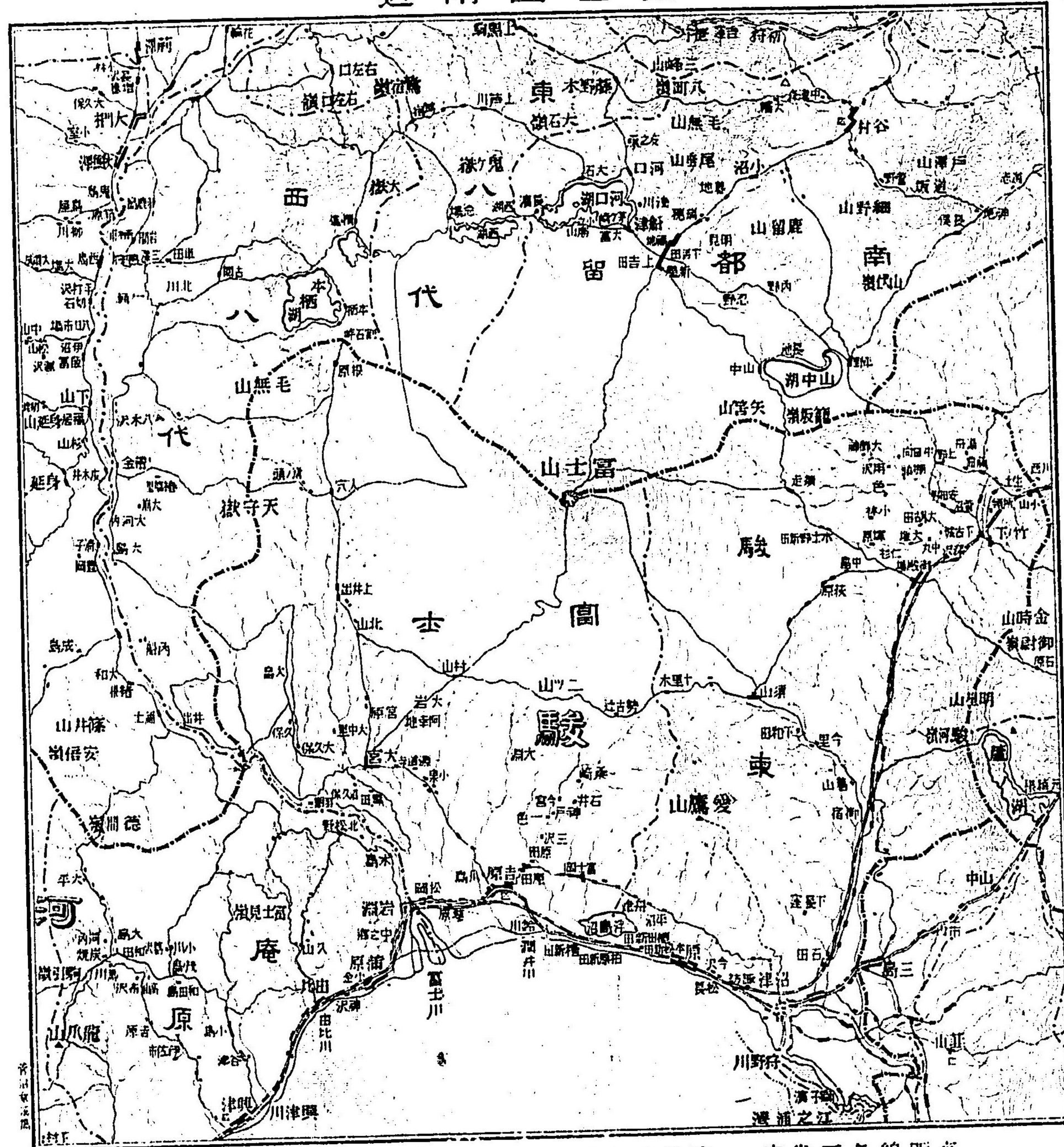
圖略近附嶽ヶ八



TOKYO

LIBRARY
MUSEUM
OF
ART

近 附 山 士 富



1 0 1 2 3里 一ノ分万四千尺縮 突米百毎線距高

00000
 00000000
 0000



明治
40 7 25
内立

LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO
1907

緒言

山は吾徒の友なり、而して其友を省みるべく、吾徒は常に紫微の巔を極め、天の低きを歎ぜずんば非ず、若し夫れ雲霧縹渺として人寰を杜絶し、盛夏三伏の候、冷風骨に徹る大雪谿の上に佇立する時、必らずや此良友の真相を天下に發揮せん事を期する者、啻に一再に非ざるなり、是に於てか「やま」一篇なる、行文粗笨、辭句凝澁、或は吾良友の面目を毀損せざるなきやを憂ふ。

吾邦俗口を開けば則ち謂ふ、日本は海國なり、吾人

は海國男兒なりと、然り、吾邦の地勢四面海を環らし、行く所として浩洋萬里の波濤を靚ざるはなし、然れども吾邦は必らずしも單に海國の稱を以て中れりとなす可らず、全島實に山嶽丘陵を以て緯となす者にして、富士の高嶺峻秀千古に冠たるは言を俟たず、信濃を中心として、越後越中飛驒甲斐に連亘する國境の如き、高山峻嶺相肩摩して、其高さ各一万有似、巍々として霄漢を摩するの壯觀は、宇内殆んど其比を見ず、外客の常に誇稱するアルプス山系の如き、大は則ち大なりと雖も、大陸の大と比較して、

何ぞ言ふに足らんや。若し地の大を以て言はゞ、吾邦は蕞爾たる一小島嶼のみ、而して千古不滅の雪を冠とし、天花の絢爛を衣とせる大巨人を有するの多きは、吾徒が常に誇りとする所なり。

然れ共、吾邦人は海國民として海を知らざると一般、又山國民として山を知らざるなり、殊に都人士の如きに至りては、山嶽を以て徒らに丘阜の高を加へたる者となすに過ぎず、然り山嶽は丘阜の高きに過ぎざれども、之を綿々たる水面に見ずや、金波の激澗たるもの、以て凝脂を洗ふべし、然れ共怒浪澎湃と

して天に嘯けば、舟楫を吞吐し、人畜を奪ふ、山嶽は實に怒浪なり、丘阜は實に金波なり、盍んぞ怒浪を以て、金波の大いに興りたるものとすべけんや。標高一万有餘尺、巍然として千古に聳峙する者、万嶽の宗となり、百川の源となる、其峭峻硜礪なるもの、倪董の筆と雖も、能く其眞を寫す能はず、雲霧長へに封じて、靈氣常に磅礴し、天花の繽紛たるもの、靈鳥の磔々たる者、全く人寰に於て豫想すると同じからず、試みに之を攀ぢて日月と語らんとすれば、雲棧途を拒み、崦巖前に横はり、谿流屢怒漲し

て、容易に近づく可らず、寝ぬるに屋なく、食ふに食なく、常に食と住とを擔ひ來りて、猶雷雨の脅かす所となり、寒威の侵す所となり、惴惴蹀躞の餘、屢僵れんとして、始めて天壇の秘鑰を排くを得、斯の如き高山の吾日本帝國に在りと言はゞ、都人士中之を信ずる者恐らく万に一を期する能はざるべし、然れども古來人跡不到と稱せられ、山魃木魅の巢窟と稱せられ、一個の探險隊を組織するに非ざるよりは、容易に登躋する能はざる山彙は、實に吾本島の中北部に横りつゝ有るなり。

吾徒何の因か、常に山野の蹊跡を好み、徒らに樵夫
と伍して、山靈愛惜の靈域を踏破し、而して猶洽く
同好の士を獲む事を欲する者、則ち其未定稿を筐底
に探りて、強ちに之を梓に上す、吾徒元より山嶽の
真相を描き得たりとは言はず、山嶽の崇靈は、到底
吾徒が不熟の筆を以て傳へ得べき者に非ず、只其一
端を覗ふの材とならしめば、蓋し望外となさんのみ。

明治四十年七月

著者共識



(影攝月八年八十三治明)

頂 絶 山 馬 白

法徒の因縁 蓋し山野の曠野を窮み 徒に樵夫
 と稱して 山嶽愛惜の靈威を踏破し 而して薪斧
 同好の土を獲む事を欲する者 切ら其未定幅を管底
 に探りて 強ちに之を梓に上す 吾徒元より山嶽の
 眞相を描き得たりとば言はず 山嶽の崇峻は 到底
 吾徒が不熟の筆を以て傳へ得べき者に非ず 眞實に
 筆を颯ふの村となりしは 蓋し望外と云ふ可き

明治四十年七月

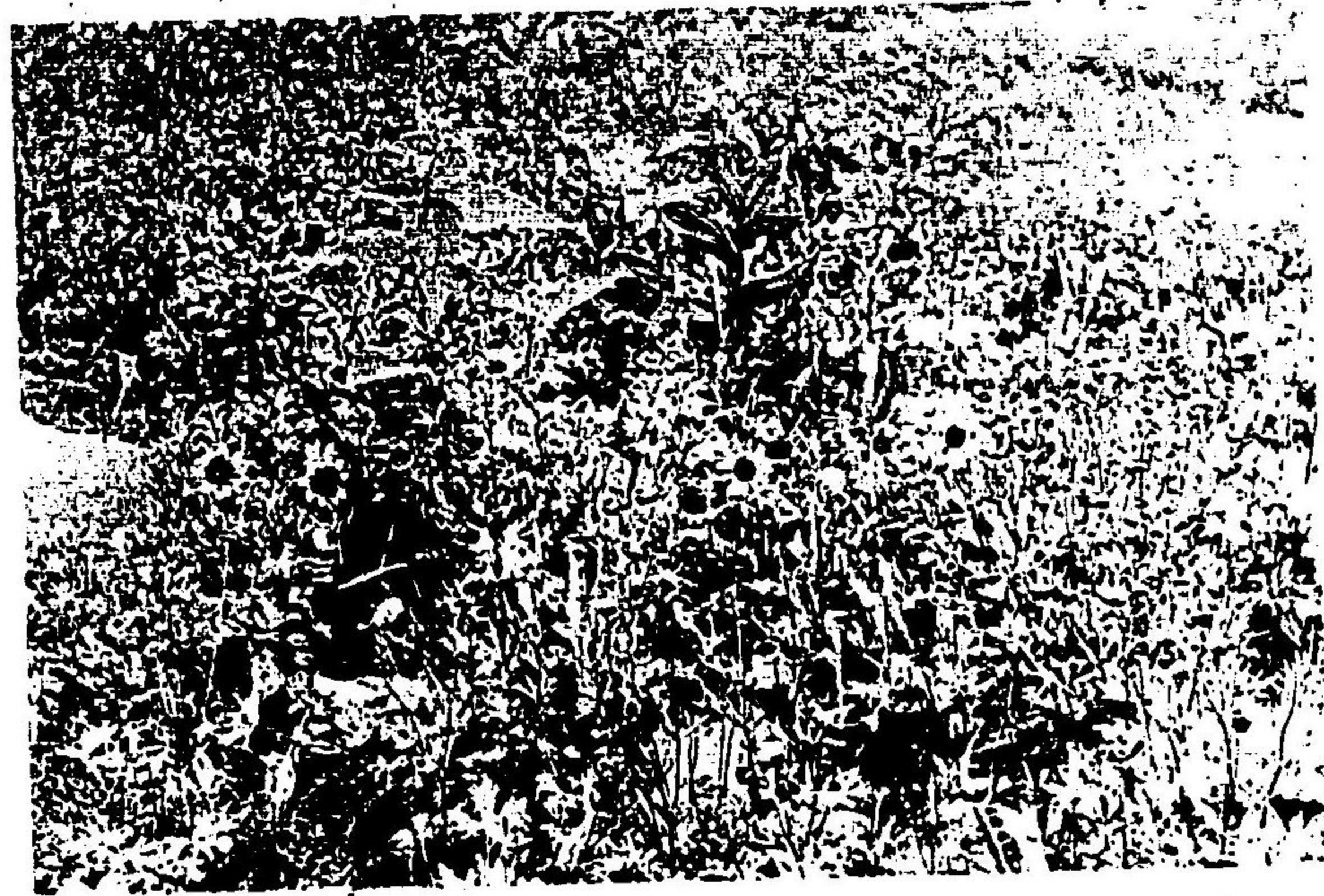
著 者 其 識



白馬嶽の大雪 照 (明治三十三年八月攝影)

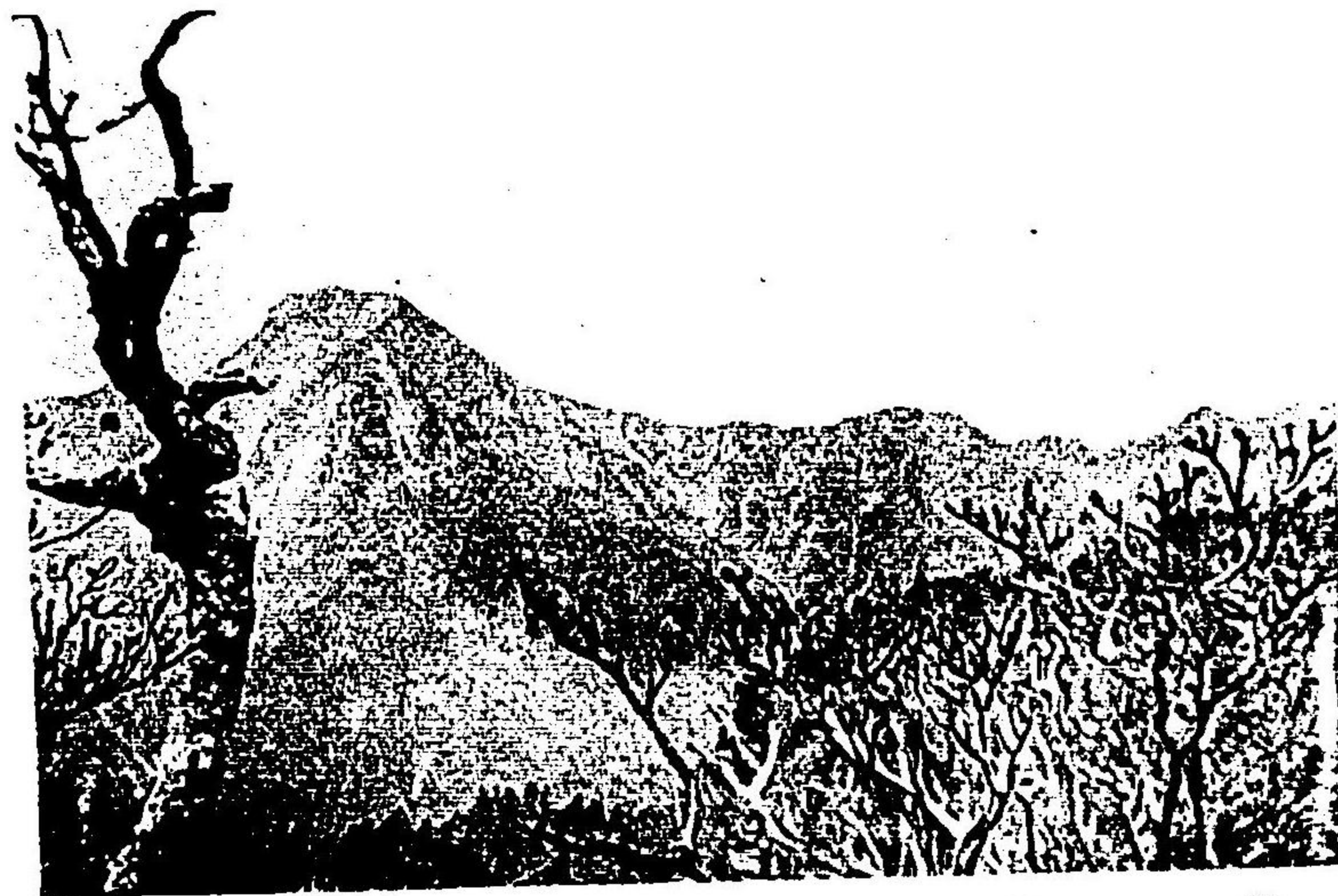
太古冰河之遺跡





(影攝月八年八十三治明)

畑花御嶽馬白



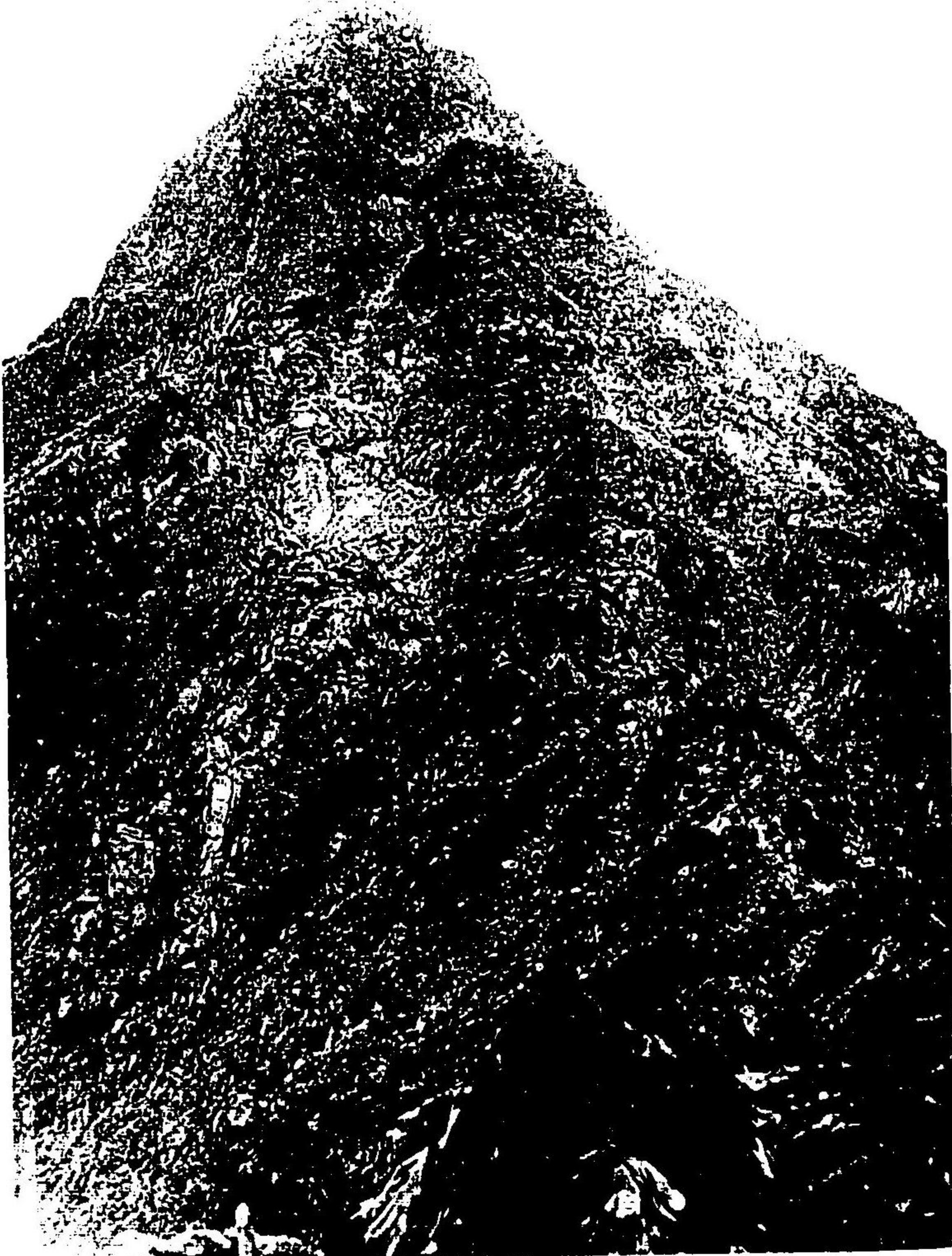
(影攝月八年七十治明)

山妻高



(影撮月八年九十三年明)

む望を峰連の岳ヶ父祖りよ山立



(影攝月八年九十三治明)

頂 絶 岳 ケ 鎗



(影攝月八年九十三治明)

牛 殘 の 近 附 泉 温 岳 ケ 槍



(影撮月八年九十三治明) 岳ヶ館



(影撮月八年七十三治明) 岳ヶ館



(影撮月八年九十三治明)

岳 燕



(影撮月八年九十三治明)

山 明 有



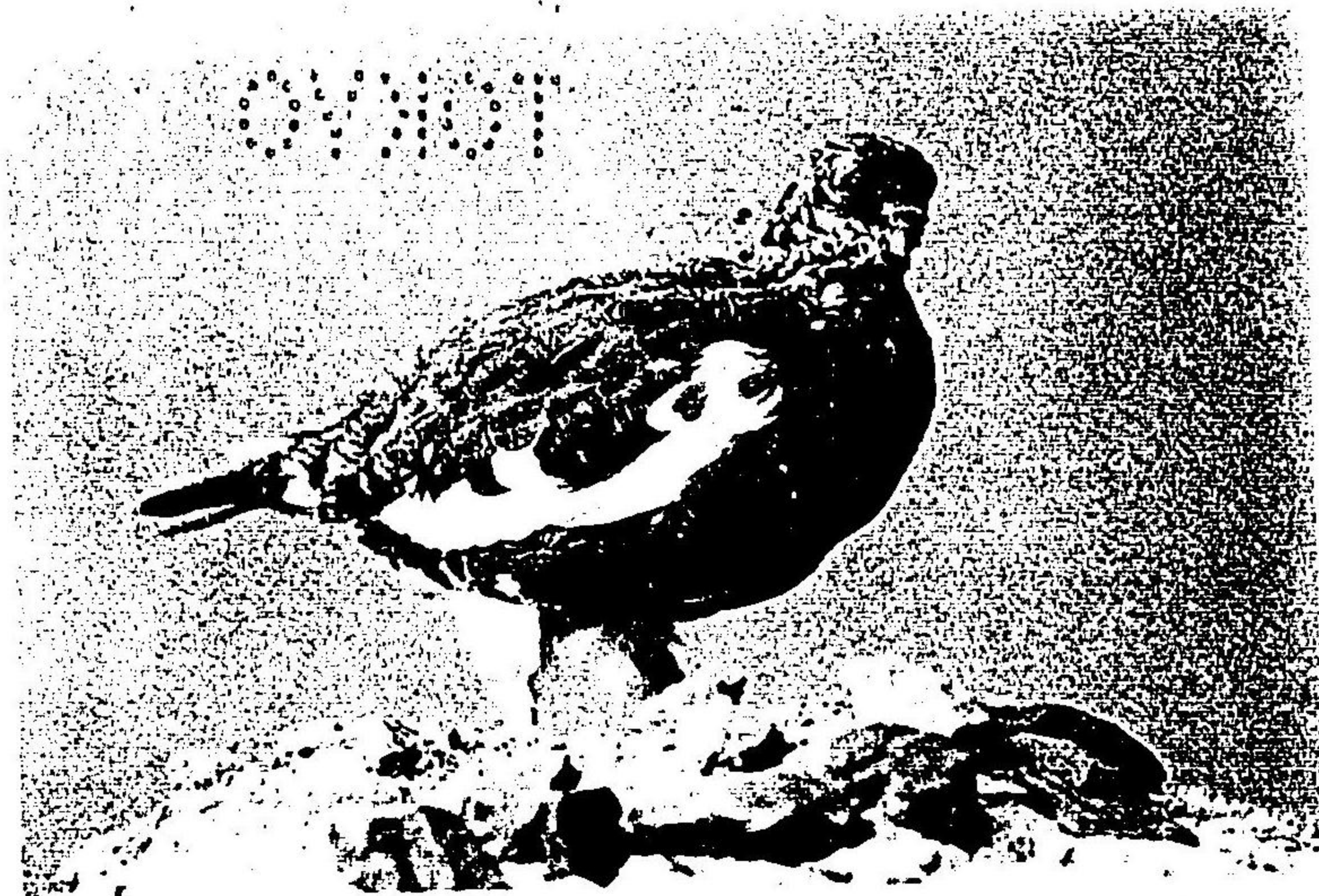
(影撮月八年七十三治明)

口 火 噴 山 間 淺



(影撮月一年十四治明)

山 間 淺



(雄) 鳥 雷 の 夏



(雌) 鳥 雷 の 冬

光來御の山土富



富土山の御來光

や ま 目 次

白馬嶽第一回登山記……………一
白馬山雷雨記……………三
明科・丹生子下・大町・木崎湖・佐野坂峠・
四ッ屋・携帯食糧・烏嶺學士・東道者・石窟
・細野・双股・蝮蛇河原・信濃撫子・葭原・
晝餐・沼池・熊の穴・白馬尻・大雪谿・大魔
風・巨巖・雷雨・洪水・大畝陷・戸隠升麻・沓
濫・費用……………六
第三回登山記……………一三
日本アルプスの雪及白馬嶽氷河……………二三

白馬嶽植物目錄……………二七

日本アルプス三大横斷……………一四六

一 日本アルプスとは何ぞや……………一四六

二 第一回横斷(白馬嶽裏山越)……………一五八

白馬嶽登路案内……………一六六

三 第二回横斷(針木峠及越中立山)……………一九一

針木峠……………一九一

越中立山……………一九九

立山再登記……………二四〇

針木峠及び越中立山登路案内……………二五一

針木峠及び越中立山植物目錄……………二五四

四 第三回横斷(槍ヶ岳及常念山塊)……………二七四

二 上途……………二七六

三 宮城……………二八二

四 中房温泉……………二八八

五 有明山……………二九〇

六 燕岳……………二九三

七 大天井山……………三〇五

八 常念嶽及一ノ俣……………三〇七

九 無人の境……………三二五

一〇 槍ヶ岳……………三三四

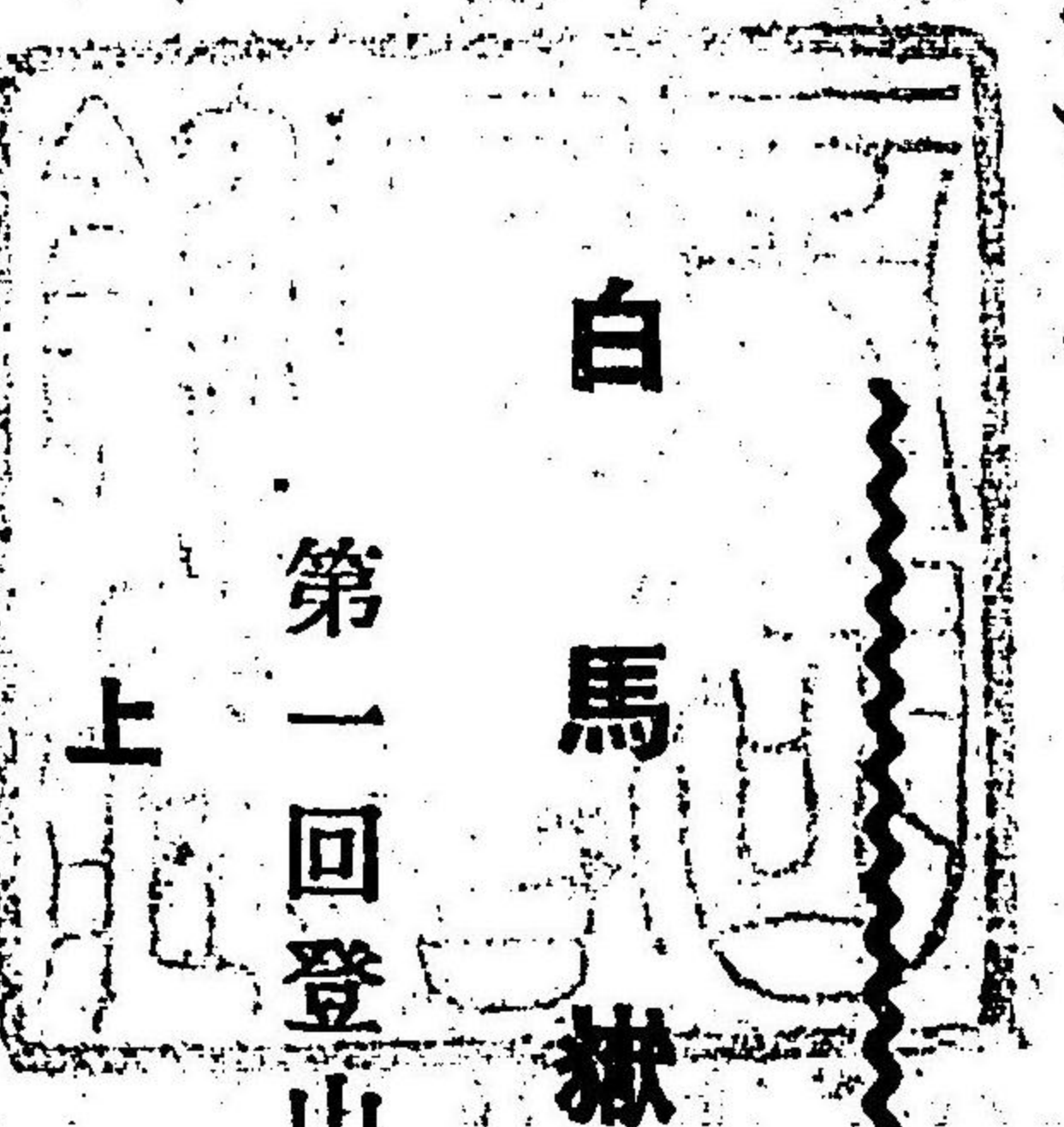
一一 宮川の池……………三三〇

一二 上高地温泉及徳本峠……………三三三

一三 笠ヶ岳……………三三五

一四	穗高岳	三三七
	有明山、燕岳、大天井、常念岳登路案内	三三九
	槍ヶ岳登路案内	三四一
	有明山、燕岳、大天井山及び槍ヶ岳植物目録	三四三
	浅間山	三六一
	戸隠山及び飯綱山	三七六
	黒姫及び妙高	四〇〇
	八ヶ嶽	四一〇
	八ヶ嶽の山勢・八ヶ嶽の登路・甲州街道八ヶ嶽の裾野・本澤温泉・硫黄嶽・横嶽の植物・赤嶽の絶頂	四四五
	富士山	四五五

やま
 志村烏嶺
 前田曙山



第一回登山記

鳥嶺

信濃越中越後の三國に跨りて大山あり高さ一萬尺。實に坤輿の中樞萬邦の重鎮にして崇高雄偉天下に冠たり。有史以來三千載歌仙も未だ其の崇高を歌ひしを聞かず。畫聖も未だ其の雄偉を畫く能はず。朝日に映じては殘雪白駒の蒼穹を奔騰するが如し故に信州の土民呼

んで白馬と云ひ。夕陽を受けては紅蓮の空際に開けるに似たり故に
越人名けて大蓮華と稱す。峯頗る俊秀未だ几下の足跡を印せず時に
神仙の薬草を尋ねるを見るとかや。谷甚だ幽邃會て溷濁の水を流さ
ず潭淵に藍靛をたへえ奔湍珠玉を綴る。高嶺に佳木異草あり麓に珍
禽奇獸を見る。余甲辰の夏山麓の一村北城村字四ツ屋に旅装を整へ
人夫數名を督し白馬登山の途に上る。

八月廿日。午前五時半出發露繁き道芝を踏みて進む。朝霧既に消れ
ども旭日を見ること能はず。雨雲漸く低く草と木と相囁やいて聲を
傳ふるが如きを見る忽ちにして細雨の面を打つあり然れども東方の
山際稍明なるを以て一縷の望みを之に囑し心窃に天の晴れんことを
祈る。夏草深き北原の細徑をたどり午前七時二股に到る。南股及北
股の兩溪流此地に合し松川となりて東流すること一里弱内川を容れ

ては名さへゆかしき姫川となり越后に入る。
雲に聳ゆる鍵ヶ岳谷間に残れる千古の白雪融けては之れ南股の溪流
となり。白馬の雪も今朝とけて爰に北股の溪流あり。
南股の溪流を徒渉す水深腿に達す。水頗る清冽寒冷骨に徹す。之よ
り進めば山容水態頓に變じ流水轉石亦俗界のものにあらざるを覺ゆ。
山麓帯既に盡きて將さに喬木帯に入らんとす。シナノナデシコダイ
モンシサウイハオトギリ等の今を盛り咲き亂れたるに心引かるれ
ど前程を急げば願もせずユヅリハの野生多きを見る。

南股を渡りてマイゾレと稱するところあり路は北股の岸に沿ふ。左
方の峰より流下する二瀑あり一を口元ノ瀧の澤他を奥ノ瀧の澤と呼
ぶ。降雨なきことこゝに二旬兩瀑たゞ潺湲たる細流を見るのみ。一
度降雨あらば二大瀑布を生ずべしとは案内者の言なり。此邊多く蛇

紋岩を見る。ツチアラシと稱する所を過ぎてヨシハラに到る南股を渡りてより半里弱。北股の溪流はこゝに日蔭淵の深淵をなす。兩岸相迫り水最深く殆んど無底の深潭をなす。此附近に炭小舎あり、白馬登山者が降雨の爲め南股の溪流に歸途をはさまるときは皆こゝに一夜を明かすを常とすと聞く。ヨシハラを過ぎて下の大平に出て之れより北股の岸を離れ上の大平に上れば足趾益々仰ぎ細徑全く喬木帯に入る。斧鉞曾て入らざる太古のまゝなる喬木帯、合圍の巨幹高き數丈、枝極密、横白晝猶ほ薄暮の如く、陰濕の氣肌に迫り、身は始めて深山にあるの思あり。而して一の奇とすべきは、白馬の喬木帯はツガ、モミ等の針葉樹少なきことなり。八ヶ岳有明山等の喬木帯は、殆んど針葉樹より成る。八ヶ岳の一峰硫黄ヶ岳より西北一帯に見る針葉樹の御料林の如き、其の林相の美なる多く、其の比を見ず。戸隠の喬木帯は針

葉樹及潤葉樹の混淆林たり。針葉樹の山は、四季其の色を變せずと雖も、遠く之を望めば暗黒色にして、吾に陰鬱の感を與ふ。潤葉樹の森林は、嫩芽萌ゆるのとき淡紫色に、新緑滴らんとするときは吾に爽快を叫ばしめ、淡紅濃朱燃ゆるのとき、吾に熱情の抑へ難きあり。高山喬木帯の紅葉は、其の鮮麗、低地の者の遠く及ばざるところなり。天高く氣澄めるの候、殆んど潤葉樹より成れる白馬の喬木帯紅葉の美果して如何。上の大平より數町にして沼池に至る。小溪流あり、ツバギ澤と呼ぶ。此附近地勢低窪、往昔は水は湛えて一大湖水をなせしも、其の岸の一部缺損して、今の干潟となりしと云ふ。二股より一里半。午前九時、暫時休憩せし傍に一草あり、莖を抽くこと三四葉形、凡にあらず。注視すれば、はからざりき之れなん、彼の有名なるトガクシ、シヨウマならんとは。附近を探りて三株を得たり、莖の高

六
さ一米突にも達するものあり。斯の如く盛なる發育をなせるは、未だ
會て聞かざるところなり。本種は故矢田部博士が、多年前信州に於て
始めて採集し、其の後明治十七年、同博士は再び戸隠にて採集せられた
り。去れど博士の採集せられたるは、戸隠の何れの邊なりしか不明な
りしかば、何人も之れを得ること能はざりき。明治二十四年、戸隠大洞
澤に於て多數繁殖せるを發見し、益々其の名を知らる。然れども近年
採集然の盛なるが爲め、濫獲の結果、此稀品も殆んど絶滅せんとす。彼
の珍種の産地を秘するが如きは、其の陋劣學者の態度にあらず。然れ
ども珍種を濫獲して其の絶滅を顧みざるが如きは、吾人の與せざる所
なり。本種は戸隠のみの特産にあらずして、黒姫山附近大砥澤に於て
も採集せしものあり。羽後に於ても發見せし人ありと聞く。亦此白
馬にありては、久しき以前より、其の産あるを知られたり。たゞトガク

シシヨウマを知らざるものが、同山にて採集せし標本中より、偶然本種
を發見せしものなるが故に、其の何處にて得たりしかを記憶せざりし
なりと聞く。今新に此産地を確むるを得たり。春風高嶺を渡り、谷間
の残雪始めて融く。残雪の間に咲く此花は、高尙優雅、森の女神や宿る
らん。今靈山に登る路すがら、此奇草を得たり。之れ白馬の山靈吾を
導くにはあらざるか、此行必ず山幸あらん。
中山澤を渡り、草莽の間を行く。夏草いやが上に生ひ、茂り歩行頗る艱
む。中山澤より半里も進みしと思ふ頃、再び北股の溪流に出づ。熊ノ
穴と稱するところなり、激湍轟々として天地を震撼す。白馬登山の客
は、何人も不愉快なる喬木帯より、此岸に出て、暫時天日を仰ぐときは、
一種の快感を覺ゆ。又岩の怪と石の奇とは、白馬登山路中第一の壯觀
たり。奔湍岩に激するところ、細霧蒙蒙として立ち昇る。中に物あり、

八
翻として舞ふ。或は高く或は低く、其の翅羅の如し、これ山神の夢を
載せて出でたるアサギマダラの巨蝶なり。
熊ノ穴を辭して前進するに、猶ほ喬木帯中を進む。オホイタドリ、ウバ
ユリ、ミヅバセウ、ヨブスマサウ、ヤグルマサウ等の高地性植物は、非常に
盛なる蕃殖をなし、オホイタドリの如きは、三米突内外の高さに達し。
ミヅバセウの如きも、其の葉一米突以上の者珍らしからず。ヨブスマ
サウも、莖長三米突以上に達す。ヤグルマサウの如きも、飯網戸隠邊の
者に比すれば甚だ大に、車輻状に分出せる複葉の全直徑一米突に達す
るものありて、さながら小傘の如し。
長走澤逐上ケ澤後澤等を過ぐれば、杓子の大澤に出づ。此附近にてキ
ヌガサ、ウが路傍の小溪を埋めて、一面に開花せる状恰も、綠甞に紋様
あるが如し。

ま や
白馬尻に到れば、海拔約千六百米突。喬木帯既につきて、オホナラの喬
幹ハンノキの大樹又見る能はず。陰鬱なる喬木帯を出て、開潤なる
灌木帯に入らんとす。たとへば、永夜の眠より醒めて、白日を見るの心
地す。シモツケサウ、ナツユキサウ等一面に開花し。ベニバナイチゴ
の朱唇何をか語らんとする者の如く。絶壁に懸れるカライトサウの
紅穗風のままに、ゆるげける様。其の美筆紙に盡し難し。ムシトリス
ミレの紫花三四初心の採集家にあらざるも、胸先づ躍る。特に激流奔
湍の奇觀を極めたる北股の溪流も、此處に到れば、全く氷結して、萬古融
解せざる氷雪となり、皓々皚々谷を埋む。雪上より來る冷風は、凍列と
して寒威骨に沁す。眼に觸る、草木耳に聽く鳥語、全く人界の者にあ
らず。嗚呼吾人は既に人圈を脱せるなり。杓子の峻嶺左に聳え、蓮華
は巨人の如く、右方に峙ち、白馬絶頂の雄姿却て見るべからずと雖も、葱

平の鮮綠遙かに吾人を迎ふ。
 從來白馬登山者は此白馬尻に宿泊するを常とせり。然れども別に石室等のあるにあらず只一大轉石の傍らに樹枝草莖を寄せ掛け其の下にてはかなき一夜の夢を結ぶに過ぎず。前年企てられし白馬登山會の一行は此露宿地にありて風雨に襲はれ周章狼狽全く潰亂せることありしと聞く。げにや此白馬の如く山下村民皆以て神聖なる靈山として崇敬し人の此山に登るあらば山神其の神威を汚さるゝを怒りて所謂嶽暴あり。強雨忽ち到り河水堤を壞り暴風樹を抜き五穀爲めに稔らず一村飢寒に泣くに至ると信じ會て一人の登るものなく山中一の祭神なし。されば登山路の比較的容易なるにもかゝはらず風雨を凌ぐべき一の設備なければ登山の途中にて風雨の難に遭はゞ何人も殆んど身命を塔せざるべからず。

白馬尻より全く残雪の上を行く葱平まで約二十町もあらんと思はるる一大雪溪。残雪と云ふも下界の雪の如くならず千萬年全く融解することなき氷雪堅きこと岩石の如し。日中にありては表面一二寸の厚さのみ僅に融けて柔かきこと普通の雪の如し。雪上は平滑ならず小波状の凹凸ありたとへば渚に寄する激漣の氷結せるが如し。されば之を足掛りとして登るに左程の困難を感ぜず。若し他の高山ならんには胸突き鬚剃りの峻阻を極むべき七八合目の大部分は此大残雪の上を行くこれ白馬登山路の容易なる一因とす。
 雪上を行くこと七八町遙か前面の雪上に怪しき黒點を認む。吾れ人共に其の何物たるかを解せず。石か石にあらず蠢爾として動けり。鳥か鳥にあらず飛ばんともせず。熊か熊にあらず。漸く近づきて我が雙眼鏡底に映せしは驚くべし鶴髮童顏の仙者……峰に藥を求むる

の仙か……次第に近づけば之なん山麓附近の人々が山ノ神の如くに
思へる老夫なり。人夫は彼に向て其の何れより來り將さに何れに去
らんとするかを問ふ。老夫曰はく白馬の頂上にありて藥草を求むる
こと、こゝに十有余日然るに朝來天候甚だ不穩特に絶頂より明かに能
登半嶋を見ることを得たれば今宵必ず暴風雨の襲來あらんよつて蒼
皇下山するものなり之より登山せんとせば十分なる注意を要すと。
一行之を聞きて茫然自失す。

夏は藥草を探り冬は獸を逐ふて一ヶ年の大半此山中に生活し最も山
中の經驗に富む老夫の豫言疑ふべくもあらず。特に白馬山上の風雨
の恐ろしきは經驗あるものゝ齋しく認むるところなり。
人夫の一名は曾て山上にある參謀本部測量員の爲めに米を擔ふて登
山する途中風雨の難に遭ひ困苦を犯して漸く峰に近づくや谷より吹

き上ぐる烈風は拳大の石礫を飛ばし杖折れ笠砕け僅に匍匐して進む
しかも風の烈しきときは將さに溪谷に吹き落されんとす依て雙手に
全身の力をこめて岩角に蟻附すれば肢軀風の爲めに掀翻せられ恐ろ
しさ云はん方なしと語る。談或は誇張に失せん然れども附近の地勢
を案ずるに白馬の左方頂上より云ふは蓮華の連幃東南に延び右方は
杓子鑢の山脈西南に連亘す此左右の連幃に衝突せる烈風皆此谷に集
まり霧直に雪上を吹き上ぐるときは風力必ず恐るべきものあらん。
老夫の豫言と人夫の談とに驚かされ一行逡巡して進まず。然れども
頂上に到らば身を容るゝの石室あり。以て風雨を凌ぐべく我れに數
日を支ふるの行糧あり又憂ふるに足らざるなり。未だ山上に達せず
して中途風に遭はゞ又如何とすべからず即ち一行を督勵して進む。
午后三時天候一變陰雲全く晴れ愁眉漸く開く。依て程近き葱平に露

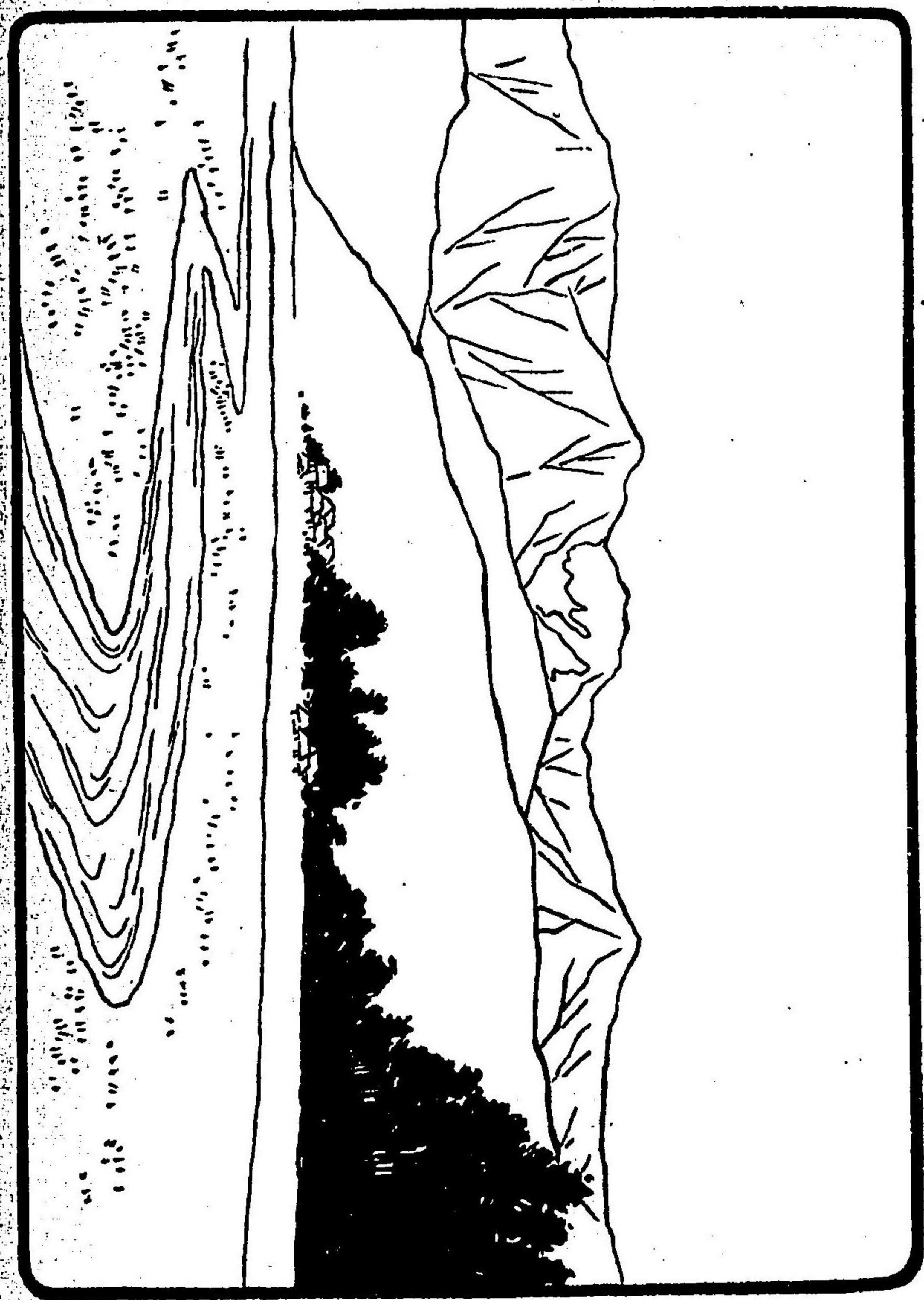
宿する事となす。此附近融雪の傍には高山植物の百花絢爛其の美云はん方なし。此百花を褥とし暫時休憩す。朝來困難なる山地をひた走り走り来りし事なれば一行重荷の爲めに困憊し柔かき稚草の上に疲れ果てたる身を横たへ眠むるともなく眠むりぬ。余獨り四近を探りてしきりに採集す。こゝに一草を得たり、ウメバチサウに似たれども形態頗る瘦少可憐一見して其の新種たるべきを認めたり。ウメバチサウ屬には、ウメバチサウ及シラヒゲサウの二種あるのみ。若し新種ならんには、本邦のフロラに一品を加ふるものなり。十數種を探り、歸來理科大學牧野氏の鑑識を乞ふ、果して新種なり。本種はバーナシヤ、アルピコラなる學名と、ヒメウメバチサウなる和名とを得たるものなり。

大殘雪盡きて、一面に綠氈敷けるが如きところあり。高山植物盛に繁

生す。シロウマアサツキの満開せる實に葱平の名稱空しからず。ベニバナイチゴの朱唇、タカネバラの紅花、龍鬚虬鬚に似たるもの之れイハヒゲにあらずや、シヤクナヅの黄花なる之れや、蜀山の石華ならん、シナノキンバイ、ミヤマキンバツゲの黄葩、綠晶車百合の清楚、黒百合の妖冶、シコタンサウの可憐なる誰か心を動かさざる、雪割櫻、ナンキンゴザクラはこれ山姫の簪の花か、濃紫、淡紅、妍艶を競はし、幽香馥郁、凡骨爲めに香ばし。げにや雲霧縹渺のところ、絢爛艶麗なる所謂御花畑の光景、其の美、其の麗、何物かよく比すべきものぞ。此天の樂園に逍遙する吾れは、心既に神身はこれ仙。葱平より杓子岳を仰げる光景は、壯大雄偉を極む。特に其の前面に傾斜四十度にも達すべき急峻なる大殘雪が、氷河の如くに横はれる、益々其の景をして壯ならしむ。即ち携へたるカメラを据えて、一葉を撮影

す此寫眞は他日ロンドンアルバインジャーナル誌上に登載せられし者なり。

葱平の露宿地に到着せしは午後四時二十分なり。二名の入夫をして露宿の準備をなさしめ、一名の入夫に寫眞器を携帯せしめて程遠からぬ白馬の絶頂を極む。葱平の上方に亦一大残雪あり此附近に所謂氷河の遺跡を見る。登ること少許にして參謀本部測量員の設けたる石室あり大さ十人を宿せしむべしと雖も當時頗る破壊せるありて山頂の互寒を防ぐ能はず葱平に露宿地を撰定せしは頗る先見の明ありしを覺ゆ。之より登ること七八町にして絶頂に達すこゝに參謀本部一等三角點あり。山骨現はにして草短く密氣常に磅礴雲霧徂徠す。足は信濃越中越後の三國に跨がり身は俗界を抜くこと一萬尺今や人界と自然界との交關に立ち標渺紫微に入るの想あり。此高遠雄大なる



馬山

宇宙の大觀に接しては、口言ふ能はず、筆紙も盡し難し、胸中一塵事なく、
愴然として涙の滂沱たるを覺えず。

三角點の下に踞して、主要なる四近の地點を測るに、鐘ヶ岳の頂きは南
七度西に立山の頂きは南三十度西に、富山市街の方向は殆んど正西に、
富士山は南二十度東に、八ヶ岳は南三十度東に當れるを知れり。雲霧
漸く多くして、四圍の展望十分ならず、僅かに以上二三の方位を測るを
得たるのみ。前路を取りて露宿地に歸らんとすれば、忽ちにして下界
を鎖せし白雲怒濤の如く、先を争ひ岳頂を目懸け、轟然として上り來り、
身は屢々白霧濛々の中に包まる。

夕暉は遙かに日本海の彼方に没せんとし、其の前面に横はれる奇峰の
夏雲は、皆紫金色の覆輪を着く。或は朱馬の緋鬣を振て奔逸するが如
く、或は金兜緋甲の勇士が炎焔の内に奮闘するにも似たり。又一段の

奇觀を呈す。既にして暮色蒼然遠山近水夢よりも淡はし。露宿地に歸れば薪は山の如く飯既に成る。飯は粗糲にして食ふ能はずと雖も白馬アザミ山アザミの一種の羹は實に幾椀をか盡せり。黒暗々たる夜の帳は四近をかくし身は高山に在るを覺えざれどもさすが三伏の候残雪多き傍にしあれば山氣肌に沁して寒堪え難し。乃ち盛に薪を積みて火を焚くに火焰數尺十歩の間夜暗を破りて眉目明かなり。焚火によりて僅かに寒さを忘るれば疲れ果てたる四名の五躰綿の如く皆華胥に遊ぶ。翌午前二時頃にやありけん一味の高寒紫府より來り短夢忽ち破る。中宵山の如く積みたる薪は悉く白色の灰となり闌干たる星斗頭上に近く手以て捫すべし。夜雲の吾が傍を過ぐるもの恰も素車白馬の仙客が蕭々として頂上に進むが如く或は怒濤の音なくして岩根に碎くる有様其の怪其の奇云ふべからず。既にし

中

て一同皆覺め盛に火を焚きて天明を待つ。

八月廿一日。

午前四時半朝飯を了り人夫は悉く結束して余が命をまつ。本日は如何に行動すべきか計劃未だ全からず。前夜以爲らく幸にして天候一變風雨の災厄を免るゝを得たりと雖も旱天こゝに二旬既に暴風雨の前兆あり出發前の天氣豫報低氣壓の中心沖繩にありしを報ず遠からずして天候一變すべし採集せし植物も意外に多ければ翌朝再び頂上に登り絶頂の大觀を恣まゝにし直に下山の途に就かんと。然れども既に此地に來り鍵ヶ岳方面を探らずして歸るは寶の山に入りながら手を空うして歸るに等したとへ多少の險を犯しても鍵ヶ岳を経て歸

途に就くべきなり。三名の人は早や要なし依て一名を留めて他の二名に下山を命ず。然るに彼等余に乞ふて曰はく此山に登りしこと既に數回然れども未だ曾て鐘ヶ岳に至りしことなし日頃之を遺憾とせり負荷輕からず途亦頗る峻絶なりと雖も願はくば共に同伴されんことをと。乃ち望みに任せて相共に鐘ヶ岳に向ふ。研を競ひ艶を争ふ葱平附近御花畑の千紫萬紅新なる晨の光りに一層の光彩を添へ眼もくらめくばかりなり。此樂園に夜な夜な遊ぶてふ天ツ乙女が脱ぎ棄てし羽衣霓裳化して羽衣草となる。ハゴロモグサはレディースマンテルと呼ばれ歐洲及北米の北部に普通に産するもの本島にありては此山の外に其の産あるを聞かず花は受精せずして結實すてふ奇なる習性を有すれば虫媒花の夫れの如く美ならざれども高山植物中にて活着容易播種によりてよく繁殖す花はもとより見る

に足らざるも扇狀に褶曲せる葉形雅致に富む嫩きものは稍盃狀をなして葉縁に朝な〜白露の團々たるを見るげに Dew-cup. の別名空しからずと云ふべし。

前日登りし時と同一の路を取り再び上方の大残雪の附近に到り氷河の遺跡を精査す。氷河の擦痕は此残雪の左右數ヶ所にあり。グレーワケ質砂岩の表面に滑澤鏡の如き痕あり。(氷河に就きては後章に記す)此所より上方の山稜に上り最も高さところを傳ひて葱平の上方を南東に廻はり杓子岳の裏面に向ふ。ミヤマシホガマ、ユキワリシホガマの淡紅色の花を着けたる、タウヤクリンダウ、チシマセンブリは其の花美ならざれども、ウルツブサウの濶大肥厚なる綠葉と紫色の穗狀花は、到所に看ることを得べし。ウルツブサウは火山岩の磊々たるところ爛砂の間に生じ大形多肉高

山植物中稀に見るところの葉を生じ、圓球形の穗狀花を抽出し、淡紫色の小花を開く。本種は曩に千島列島中の得撫島にて發見せられ、本邦中千島特産の植物として珍重せられしが、明治三十二年白馬に於て發見せられ、同三十四年八ヶ岳の産地を知らる。加賀の白山にても採集せしものありと聞く。吾人が山草を愛養する所以の者は彼の風姿の可憐なるをめて、其の氣品の高尚なるを喜び、其の形態の優雅なるを愛し、其の産出の稀少なるを珍とし、其の栽植の困難なるに却て興味を有すればなり。故に高山植物は、一般の彼の西洋草花に見る爛美塗るが如く、艶麗燃ゆるが如きものなし、之れ猶ほ西洋草花の日本の風韻乏しきが如し。此は高尚優雅を其の精神とし、彼は濃艶美麗を其の生命とす。西洋草花の如き艶麗を山草に求むるは愚なり、日本の風韻を西洋草花に望むば痴なり。兩者各々其所長を異にす、其の一方を愛するの

故を以て他を貶すべけんや。然るに獨り此ウルツプサウは、其の穗狀花に山草的幽趣を見ると雖も、其の葉形の肥大多肉なるは、西洋草花的趣味を帶ぶ、恐らく何人も始めて此植物に接するときは、以上の感を生ずるならん。又彼の有名なるリンネサウの可憐なる小花を着くるものあり。岩石の裂罅にミヤマウスエキサウ多し、其の花の淡紅色なる、其の葉莖に純白絹の如き絨毛を密生し、其の高尚優雅なる山草中の尤物とや云はまし、むべなり、獨逸アルプス登山俱樂部はこのエーデルワイスの花を以て、其の徽章となすことを。杓子ヶ岳の裏面に達せんとするところ、右方に深谷を見る。峰より數町のところに立壁の小舎と稱する岩窟あり、數名を容るべし。余は宿泊せしことなしと雖も、雨露を凌ぐに屈強の所と聞く。

強烈なる日光の直射を受くる岩壁に、シコタン草の多く開花せるを見る。シコタン草は千島列島中色丹島にて始めて発見せられしもの、常に岩罅に蝸附して概形稍ツメレンゲに似たり。葉片紅色を呈するもの多く、小白花を着く、老杉古松の森々たる風姿を寸眸の間に眺むるの盆裏龍鱗古蒼崎嶇踟躕せる盤根の傍らに按排するに可憐なる此高山植物を以てせば、豪宕たる樹容翠綠滴たる龍鬚虬髯と相反映して、其の天真の風姿を増し、眺むるものをして身は雲烟漂渺の間に立ち、鬱氣の磅礴して身邊に迫るの感あらしめん。白馬より杓子の裏面に至るの間、峰傳ひに迂回し、左右に下ることなくば途を誤るの恐れなしと雖も、之れより鏈ヶ岳の前面に下るには、唯二道あるのみ。一は此所より直に右方に下り、鏈ヶ岳の裏面中腹を横断して、其の右肩に迂回するもの、獵師採薬者の通過せる細徑を認むべし。一は之れより猶ほ杓子ヶ

岳の方向に進み、其の裏面を過ぎて鏈ヶ岳の絶頂を越ゆるものなり。前者は稍平凡なりと雖も、クモマキンパウゲ、ヒメオダマキ(ミヤマオダマキ)タカネキンパウゲ等の稀品を得べく。後者は植物の採集に於て或は前者に及ばずと雖も、展望の絶佳山勢の雄峻なる多く、其の比を見ず。此地に來らば何人も二者何れの途を取らんか、必ず惑ふところならん。余は始め前路を取りて山草中の稀品を採集し、中途より鏈ヶ岳の絶頂を極め、天下の大觀を恣まにし、一舉兩者の長を取らんと決せり。仍て峰より右方に降らんとせしとき、白馬の山頂を顧るに、前面に急峻なる葱平附近の大殘雪を隔て、白馬の山頂峰際碧空を劈く、其の壯嚴なるさすがは日本アルプスの重鎮。鏈ヶ岳の裏面に至り、余は又一新種を発見せり。荳科に屬するもの新學名をアストラガルス、シロウマインシス、和名をシロウマワウギと呼

ぶ。イハワウギに比すれば全株瘦少、葉黒色を帯び、花弁白し。イハワウギの花弁は帯黄色なり、葉は兩者の概形に大差あり。昨はヒメウメバチサウの新種を得、今又シロウマウギの新種を得たり、一舉して日本のフロラに二新種を加ふ、余の喜び知るべきなり。クモマキンバウゲを搜索し、漸く其の産地を發見す。

湖北の烈風、日本海上を渡りて直に鍾ヶ岳の背面に衝突し、凝て千古不滅の雪となる。深さ幾千丈、皓々、皚々、實に天下の偉觀なり。都門三伏金を鏢かすの候、其の一部始めて融解し、玲瓏珠玉の如き涓滴となり、轉々岩角を轉び墜ちて地に入り、化して一奇草を生ず、人呼んでクモマキンバウゲと云ふ。

此種凡種にあらず、濫りに山隈水澗に生ぜず、この靈地僅に方數米突の地域を限りて蕃殖するのみ。南臺灣より北千島に至るの間、此の奇草

を見るは、此猫額大の一小天地に過ぎざるなり、豈山草中の稀品にあらずや。莖葉頗る軟弱、誠に露にだにも堪へざるの風情あり、一株僅に二三葉を着け、一花梗を抽き、頂端に一花を開く、黄金色の花弁、金米糖状の小果を見る、多年生の草本なれども、鱗片毛茸等寒熱の變化を防ぐべき保護器なければ、適者生存の理に基ける自然淘汰てふ惡魔の大鐵鎚は、此可憐なる小草を打撃しつくして、僅に此小天地に餘喘を保たしむるに至る。然るに又科學者てふ無風流漢の認むるところとなり、無慘にも亦悉く拉し去られんとす、重ね、此草の不幸を憐まざるを得ず。

此附近より又殘雪を踏みて一直線に鍾ヶ岳の頂上目懸けて匍ひ登る、傾斜急峻なる所多ければ、草莖に縋り、岩角に蝸附して上る故に、斯く云ふ、偃松の密生せるところを押し分けて進むと、數歩にして、數羽の鶴を伴へる雷鳥を見る、人を見ても敢て驚かず、近づくこと數米突にして始

めて逃走す、彼等は實に余等が其の肉を啖ふの悪鬼たるを知らざるなり。此靈鳥は古より人の知れるところ、古人の歌にも、

白山の松の木陰にかくるひて

やすらにすめる雷の鳥かな

後鳥羽院
家隆

あはれなり越の白峯にすむ鳥も

とあり。此鳥は高山崇靈の地にのみ棲息し、曾て下界に降らず。本島にありては白山御嶽、乗鞍、八ヶ岳、穂高、槍ヶ岳、常念、岳、笠ヶ岳、祖父ヶ岳、立山等、日本アルプスの高點八九千尺以上の高地に産す。晝間は多く、偃松の蔭に眠り、早朝薄暮或は濃霧四近を鎖すのとき出て、食をあたさる。岩高蘭、イハツウギ等の嫩芽、コケモ、クロマメノキ等の果實を好みて食す。キジ、ヤマドリ、の類にして大さ鳩より少しく大に、概形ウヅラに似たり、羽毛の色は夏冬季節の異なるによりて大差あり。夏季

は茶褐色にして黒斑あり、秋季に至り羽毛交脱して白變し、殆んど純白色を呈す、されど翅のみは四時白色に、尾翼は四時黒色なり、春季交脱すれば再び茶褐色となる。斯く夏季は爛砂岩石等と其の色を一にし、冬季白色雪と同一色なるは、全く鶯鳥等の強敵に發見せられざらんが爲めの保護色なり。あはれ斯る深山に生れても、弱の肉は強の食たるを免れざるか。雷鳥に關する古人の研究面白きものあり、左に録す。

前略、此岩石の間に鳥ありて栖む、たま／＼出て、遊ぶを登山の人見ることあり、加賀の白山の雷鳥と云ふに似たり、雷鳥は此山に雷と云ふ虫ありて、形蛙のごとく、件の鳥好みて彼虫を食ふ、故に雷鳥と呼ぶと云、大さ鳩の如く、形も亦鳩に類するよし、乗鞍ヶ岳、駒ヶ岳にもありて、岩鳥といへり、一説に大明一統志に載するところの松鷲なりといへり、古本には松鷲とあり、校正の本には鷲鷲とあり、この鳥好みて松を栖家とする故に、松鷲と名づけたるか、されば和歌にも松を詠あはせたるにてしるべし云云。又一に鷲鳥と書く(鷲字

爾雅に出づ伊藤長胤が記を題せる印行の畫あり、此山の鳥に少しの差あり、此山の鳥は雄のかたち黒色に白斑あり、若石鷄に似て、雌は黃鶉に似て、むねのうら黒く白斑あり、足は趾のきはまて毛あり、雞は鳩のごとく松の實松のみどりな味といへり。(信濃奇勝録三、立科山之部)

人夫は之れを捕へんとして、彼方此方を逐ひ廻はしたれどもいかてか捕ふべき。チヨウノスケサウ、チングルマ、ヒメカラマツ、シロウマワウ、ギクモマガサ等の高山植物多し。午前十一時遂に鑓ヶ岳の絶頂に達す。こゝにも參謀本部の三角點あり、眺望の雄大白馬に譲らず。南方直に大黒嶽の頂上を俯瞰し、後立山、鹿島、鎗ヶ岳、祖父ヶ嶽等、針木峠の連脈起伏して、何れを夫れと認め難きも、一劍寒く天を刺すものは、之れ云はずして、信飛境上の雄鎮槍ヶ岳なるを知る。吾が今立てる此山と、其の名國音相通ずるも、槍と鑓とは文字同じからず。西の方晴巒兩峰を歴して雲漢に聳立せるは、これ越中の立山。殘雪鮮かに古來人跡を印

せざる劍ヶ嶽の森嚴なる覺えず吾人をして幕拜せしむ。劍ヶ嶽……
 劍ヶ嶽望むべくして即くべからず。西北方は直に洋々たる日本海を望むべし、百川之に宗朝す。富山灣を隔て、能登半島の突出せるあり、灣内白帆の點々たるを指點すべし。海上より來る萬里の長風は千古不盡の雪上を撫して直に面を拂ふ、爽涼秋に似たり。北方には直に杓子の嚙响あり、昨夕其の頂きを極めし白馬の絶頂威風堂々、群峰を兒孫視するところ、さすがは日本アルプスの英主妙高の雪戸、隱飯網淺間の煙八ヶ嶽等、東北より東南に並列す。東南遙かに雲煙模糊の間、巍然として頭角を現はすものは芙蓉峰なり。千山萬嶽之に向て長楫す。
 鑓ヶ嶽の西南に一大深谷あり、九兵衛谷と呼ぶ。黒部川八百八谷の一なり。讀者は九兵衛は之れ野人の名なるを認めらるゝならん、九兵衛は實に山麓の一老獵夫のみ。鑓ヶ嶽裏面の一大幽谷に其の名を冠せ

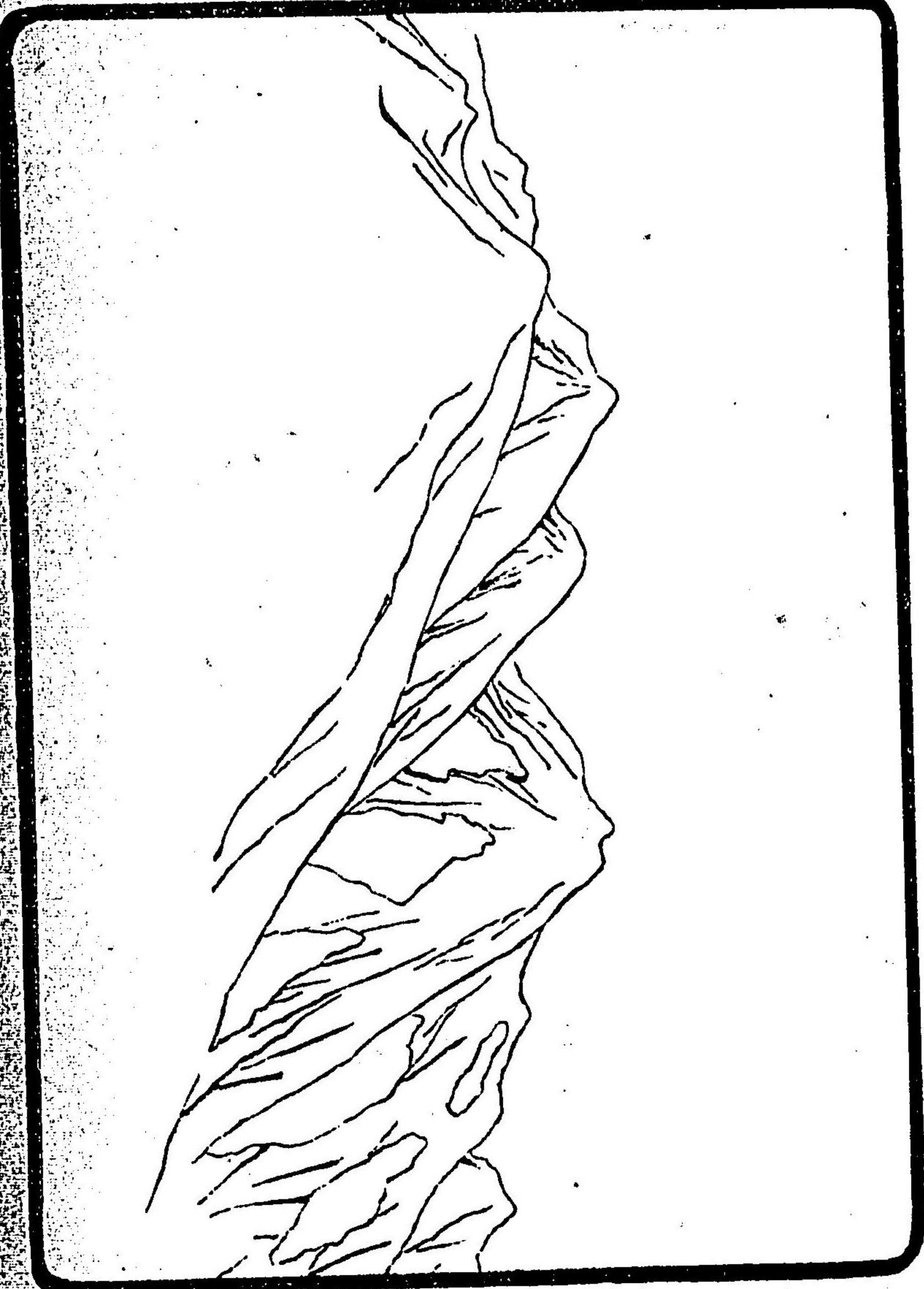
る獵夫九兵衛は、そも何人願はくは吾れに九兵衛谷なる谷名の由來を

語らしめよ。

や

ま

九兵衛は山麓の小農夫夏季は屋後數頃の石田を耕作すれどももとよ
り一家數口を養ふに足らず。故に世は木枯の吹き荒ぶ頃より此白馬
の連峰に入りて熊を討ち鹿を逐ふて細き煙を立てにけり。獵を營む
ことこゝに數十年彼れが矢先に生命を落せる畜類其の幾百千なるを
知らず。頭の霜の漸く白き今日此頃殺生を業とする身の因果の程の
恐ろしきを悟れども生類を斃さざれば兒孫飢ゆ。
朝には橋板霜白く夕には秋風尾上を渡る。萬木其の葉を振へば熊は
冬眠の準備に忙はしく鹿は枯れ初めし草を尋ねて峰を逍遙す之れ實
に狩獵の好期節九兵衛は二人の獵夫と共に白馬連峰に入る腰には數
日の糧を着け肩には一挺の種ヶ島火繩の烟の夫れよりも人の命のは



白馬連峰の獵夫

ま や

かなきを知らずや識らずや九兵衛の一行終日峰となく谷となく狩り暮
 せども近來稀なる大不獵鳥は一羽の小鳥も見ず獸は一匹の兎にも遭
 はず今こそ名高き九兵衛谷當時は名もなき深谷に入りとある石窟を
 尋ねて一夜の夢を結ばんと三人窟中に入りて火を焚き夜寒を防げり。
 九兵衛は朴直なる一老夫なれども生れながらにして備はれる彼れの
 美音鎮守の祭り日待ちの夜一度其の嬌音を弄すれば空行く雲をも留
 め梁の塵さへ舞ふと聞く。
 此夜も徒然なるまゝに九兵衛は數節の祭文を語り一節は一節より
 漸々神に入る談佳境に入りては一意話中の自然に同化して遂には我
 れを忘れ人を忘れ一きは高く叫べば餘音前谷を渡りて木魂に響き全
 山どよめくかと思はるゝ一刹那。
 驚くべし。

頭上の大盤石天井を離れ、九兵衛の五鉢こゝに微塵。憫むべし、九兵衛はこゝにはかなき横死を遂げたり。彼れの嬌音再び聴くべからずと雖も、其の名は今も猶此深谷に残れり。九兵衛の横死によりて、我等登山家は一の經驗を得たり、九兵衛ば我等に一の教訓を遺せり。曰く、

石窟に宿るときは火を焚くべからず。

下

鐘ヶ丘の絶頂より山稜を傳ひ、其の左肩に出で稍平坦なるところに休憩す、此所亦頗る眺望に富む。此日天氣特に晴朗十分なる採集を爲すことを得て、一行得意の色あり。禍福は糾へる繩の如し、此大得意の時焉ぞ知らん、數時間を出ずして余等四名の一行は天狗ピシの崖下に死

生の衢に彷彿せんとは。此所より急峻なる斜面を東南に下りて直に鐘ヶ岳の温泉に達せんとして下ること十數町雪を以て埋められたる狭隘急峻なる谷間に至り、雪上を下らんとせしに近年稀なる炎暑の爲め、溪間の残雪甚だしく龜裂を生じ危険極まりなし、如何に冒險を意とせざる余等の一行も、逡巡進む能はず、相共に顧みて茫然たり。余一行に告げて曰はく、此破壊せる雪上を降らんか、萬死に一生をも得べからず、如かず右方に聲ゆる天狗ピシの絶壁を横斷し迂廻して温泉に到らんにはと。衆之れを諾す。乃ち急峻なる斜面を横斷して天狗ピシの絶壁を過ぐ、人跡全く絶え鳥獸だにも通はざる天狗ピシの斷崖。仰げば數百丈の奇岩將さに顛倒せんとして頭上を壓し、思はず頭を縮む。伏瞰すれば千仞の谷底遙かにして白雲脚下に迷ふ、其の間岩燕の翩翾として飛翔するあり、雙脚覺えず戰慄す。一手草莖を握り、趾尖僅かに

岩角に接す。前程遙かにして進むこと誠に遅々たり、一步を誤らんか數
 百千尺の谷底に陥入り、遺骸だにも止めざるに至るべし。此時に當り
 ては一行皆生色なし力とたのみ草莖意外に脆弱根と共に岩を離れ命
 と頼む岩角不意に脚下に壞崩して轉々憂々谷底に墜つ魂を消し膽を
 冷せしこと幾度ぞや、さすがに強情我慢なる余も進退極まりて中途に
 茫然自失、暫時停立せしこと屢々なり。遂には岩石採集用のハンマー
 を以て岩角を碎き、一步步々に足掛りを作りて進めり。然れども遂に
 其の目的を達することを得たり誠に天佑と云ふべし。
 午後一時半温泉に達する豫定なりしも大に後れ、五時半辛ふじて温泉
 に達することを得たり。僅かに十數町に過ぎざる絶壁を横過するに、
 かく多くの時間を費せり如何に其の困難を極めしかは想像するに難
 からざるべし。

温泉の湧出するところは、鏈ヶ岳の前面海拔約七千尺許の處にあり。
 南股溪流の水源なり全く無人の境。湧出孔三個を認む上方の者最も
 大なり、幅二尺もあらんと思はる、岩罅より混々として熱湯を噴出し、
 岩壁を流下して一大湯瀑をなす。瀑の中途に凹處あり、何人かこゝ
 に石を積み作りしと思はる、浴槽あり、深さ胸に達す、清澄にして槽
 底の砂をも數ふべし、寒暖肌に適し、煦温春に似たり、仰いて鏈ヶ岳の絶
 壁を望み伏して残雪の皓々たるを見る、此神泉に浴して塵垢を流し去
 り、我が身の輕さを覺ゆ浴すること十五分直に南股の溪流に沿ふて下
 る、谷を埋むる残雪盛に壞崩せるところありて危険なり。温泉より三
 四丁の所に赤岩と呼ぶ所あり。一帶にオホイタドリ夥しく繁茂して
 恰も竹叢中に入るが如し、此叢中にて一行互に道を失ひ各々行くところ
 を知らず大に驚き大聲互に相呼び漸く合することを得たり。赤岩

の對岸に二子岩あり、爰に一條の悲惨なる物語あり。
 二子岩に關する悲惨なる一條の物語りとは何ぞや。鑓ヶ岳温泉の湧
 出せるを發見せしは何時の事なるや、詳細を知り難しと雖も、古くより
 山麓の人々は之を知れり。然れども、道途險絶、容易に到り難ければ、此
 温泉の諸病に効あるを知れども、人の此所に來るものなし。
 一度此温泉に浴せるものは、靈泉の斯く無人の境に遺棄せられて、願み
 るものなきを惜まざるものなし。されば明治九年陰曆九月山麓の村
 民二十一、名相謀り、木樋を以て之を遙かに下方に引き、浴舎を建て、浴槽
 を設け、諸人の病を治するときは、常に天下疾患に艱む人々を助くるの
 みならず、山下の村落之によりて、繁昌せしむることを得べしと相携へ
 て、此地に來り、木を切り、板を挽き、木樋を作り、温泉を導くの計を爲す、頗
 る難工事にして、辛勞多く、結果意の如くならず、されども協力して事に

從ひ漸く二子岩の附近に至り、假小舎を作りて、此内に起臥せり。足一
 度山中に入るも、嶽暴を起す、白馬の山神の靈泉を山下に導き、田夫野人
 の塵垢を洗はんとするを見て、忽ち赫怒し、陰曆九月二十三日、夜半、全山
 鳴動し、二子岩の上部にありし大殘雪、轟然として墜落し、二十一名の村
 民は、あはれや、悉く崩雪の下に埋められ、悲惨の最期を遂げしとなん。
 不祀の幽魂、今も宙宇に迷ふらん、溪間にむせぶ水の音も、崩雪の下より
 吾れを呼ぶか、と疑はる、風靜に雨降る、夜半、碧燐の燃ゆるを見ると、かよ。
 斯くて再び、如斯事業を企つるものなく、當時設けし木樋の遺物、今も猶
 ほ所々に殘れるを見る。かくて鑓ヶ岳の靈泉、永く野人の肌を觸るゝ
 を許さず、晝夜滾々として、此靈域に湧沸するのみ。
 オホイダリの叢中に路を失ひ、互に相失せしも、漸く合し、相共に幽か
 なる細徑を辿り、御殿場と稱するところに來る。赤岩附近より、溪流に

離れ喬木帯に入りしを以て雑草生ひ茂りて殆んど路と稱すべきもの
なく、白馬の登山路に比すれば頗る惡絶を極む。御殿場より少しく降
りしところに大澤下りと稱するところあり。急坂直下再び溪流の澗
に下る流れに沿ふて稍平坦なるところあり、大澤平と呼ぶ、大石小石轉
々たる積なれば却て歩行困難を極む。三途の小舎場に來りし頃は、日
全く没して一步も進む能はず、一行辛ふじて入ノ二股に達す。入ノ二
股は鑢より來る溪流と唐松岳より來る溪流と相合するところにして、
谷巾廣く平地なるを以て露宿に適す、即ち假小舎を急造してこゝに一
夜を明すに決す。此日の行程左程遠きにあらずしも、屢々峻絶なる
難所を經過せしを以て一行疲勞甚だしく、人夫の如きは身を横ふるや
否や前後も知らず熟睡せり。余は獨り採集せし標本の整理をなす、全
く整理を了りしは實に十一時半なりき。宵の檜火は明滅將さに消え

なんとす耳をそばだつれば溪流潺々、眼を擧ぐれば夜星山の峰近く鎌
なす月獨澄めり、満山寂として太古の如く、たゞ生氣あるものは月と溪
流と吾れのみなり、此月夜の感忘れんと欲して忘るゝ能はず。
人夫の談に十三年程以前の事とかや、五月雨永く降り續きて唐松岳の
一角壊崩し、入の二股の溪流之が爲めに阻まれ、琵琶の海のそれならぬ
ど一夜にしてこの二股に漫々たる大湖を生ぜり。岩石の壊崩により
て谷を塞ぎし大堤防、一度決するときは濁流蕩々として氾濫し、山下の
村落は如何なる悲惨に遭遇せんか、豫め知るべからず、之を見たる山下
村民は周章狼狽、右往左往に走せ、巡り善後の策をぞ講じける。先づ此
二股より村落に至るまで、要所々々に物見櫓を作り、數名交代にて晝夜
の見張りをなし、若し出水と見るときは警鐘を亂打して急を村里に報
じ、此報によりて山下村民は幼を携へ老を扶けて避難することに定め

たり。されば其の當時は山下の村民は日夜安き心もなかりしと、さもありなん。然れども幸ひにして出水の事もなく、二股に水を湛えしと三ヶ年水は漸々石罅より漏れて遂には今日の如き積となりしといふ。

翌日午前六時入の二股を出發し、溪流に沿ふて其の右側を降る、村里まで僅に二里。途中小僧ビシ等の難所ありしも、左程の困難をも感ぜず、八時二股に歸着し、九時無事宿所に歸着することを得たり。入りの二股より少しく下にて淺瀬を渡り、溪流の左側を下るときは數町にして稗畑と稱するところあり。袖ガラ澤、前カラ澤等を經て二股に至るべく而して村落より稗畑までは馬を通ずることを得るの山道ありとは後日之れを聞けり。

此日正午北城を發し、柳澤峠の悪路を越え、六里にして鬼無里に到り、爰

に一泊し、翌日五里を歩して長野に歸る。

白馬雷雨記

曙山

明治三十八年八月、世を擧げて曠古の大戦に熱狂するの時、予等同人は超然として關せざる者の如く、濫りに白馬登山を企て、嶽を鳥嶺氏に傳へて、山麓四屋に會し、鳥嶺氏としては、則ち第二回の白馬登山を試みたれども、天候險惡にして、同人と擔夫とを打して、一行二十一名、殆んど困憊し盡して、空しく白馬尻より歸還したるもの、之を白馬雷雨の記となす、當時行を共にしたるは、磯野無曆、小川草魚、後藤紫浪、佐々木眠蛙、志村鳥嶺の五氏、及び予なりとす。

本記は山中の形状等、凡て精細なる鳥嶺氏の記述に譲り、茲には反つて明科より四屋に至る蛇足を添えたり、雷雨記として殆んど無用なれども、聊か後の登山者の便に資せんが爲のみ、其費用を列記したるが如きも、又此趣旨に

外ならず。

明科

八月五日(明治三十八年)午后五時予等同人は白馬ヶ嶽を探らんとし
て、明科の驛に下り立ちぬ。交も行李を肩にして佇立し相顧みてさら
ぬだに黒き顔の煤烟に塗れたるを苦笑せり。
土用最中の炎威は天地を燦々爛々として生ある者を悶殺せずんば已む
まじき勢ひなるが信越連巒の巖嶽に不斷の雪を藏する者一道の鬱氣
と化して蒼生の上を蔽へば爽涼夢よりも淡く衣袂の俄かに輕さを覺
ゆ。

予等は驛前の小婢に迎へられて先づ其塵頭に就く亭は宏壯ならざれ
ども清酒にして實に明科第一の羈泊たり亭前に小泉あり清冽珠の如

し同人争ふて顔面を清拭し氣始めて爽かに頓に熔鑪爐中の人たるを
忘る。

明科は實に松本坦六萬石中の一部にして殷賑なる市街を形成せざれ
ども茅舍竹檐長く列りて犀川の急湍と共に走り朝雲暮烟の眺めに富
めり。

亭の主人予等が爲に語りて曰く此地より白馬に登らんと欲せば途次
池田大町の二驛を過ぎて四つ屋の寒村に到らざる可らず此間約十二
里途上馬車の便あれども曇日の大雨にて犀川橋を失ひたれば馬車は
此地迄來る能はざるを以て客は對岸押野まで徒歩せざる可らず然れ
ども人車を以てすれば僅かに通ずと予等則ち携帶行李を二輛の俵に
積み皆徒歩して跟隨し川の東岸に沿ひて犀川橋の彩虹の如くに架せ
られたるものを渡る。橋は延長二百六十間宛がら通天の架棧の如く

鵲の羽を交したるかと思はる。惜むらくは我に牽牛の風車あるも、西岸
 に織女の情を牽く者なきを。橋は對岸に近づきて断絶し、繋ぐに釣橋
 を以つてす。長さ三十間斗り、揺颯して行人を震盪せしむ。蓋し前日の氾
 濫に遭ひて墜落したるなり。
 橋を過ぎれば下押野にして、大町通ひの馬車假發著所あり。然も這般戰
 役の徵發に會ひて馬匹の缺乏したると、夜間丹生子下の棧道の危険を
 虞かりて、午后よりは馬車を發する事なしといふ。予等頻りに發著所
 の書記に説き、且つ略はすに定規外の賃錢を以てして、終に二頭立一輛
 を獲たり。
 馬車は定員八人を以て規とすれども、予等五人と行李とを以て、大半車
 中を壓す他に一人の客あり、強て同乗す。中形の浴衣に褌、衣服引の扮装
 にして、中山の黒帽を戴き、漆黒の八字髭を蓄ふる者。首より上は纏紳者

流に似て、以下は則ち吾人と選ぶなし。所謂半官半民の徒か、饒舌にして
 能く談ず。自ら言ふ、大町の産、少小客遊を好み、四方に漂泊して家を省
 みざるもの十歳、今東京より歸來す。恐らくは滄桑の感あらんと、予等問
 ふに、中房温泉の所在を以てす。蓋し同人某々、歸路を俟つて之に投ぜん
 と欲するなり。官民子鼻下の髭を捻ぢて答へ曰ふ。
 「其處に見えますが、有明山彼の山の横手が御尋ねの中房です。いやま
 う大變な處で、兎ても貴君方が入つしやる場所では有りません。私
 は先年湯治に参りまして、滞在中恐ろしい雨に會ひました。洪水が出
 て橋は流れる、湯宿は水浸し、食料は缺乏するといふので、一週間程粥
 て命を繋ぎました。もう懲り／＼ですが、然し又面白い風俗の所で、
 玄妙の趣味が有ります。」
 と予等を見る事一巡にして、大いに笑ふ。同人膝の進むを覺えず、強て其

妙趣を究めんと欲すれば、官民子首を振つて曰く。

「旅中にて斯る事は申さぬものにて候」と衆相見て哄然たり。好漢亦談ずるに堪えたりといふべし。

官民子更に話頭を進めて曰く。

「昔坂上田村麿將軍が奥州御征伐の時、此有明山に鬼が居りましたが、中々官軍を寄せ附けませぬ處が此鬼が謠ひが好きだといふので、田村麿將軍が自ら田村の謠を唄ひます、鬼が聞き惚れて出て來ましたので、將軍が其處を目蒐けて討取られました」

と好漢終に檻樓を出せり。次いで地形を説き、風俗を談ずれども、惜むべし、信用全く地を拂ふに至れり。然も中房温泉川止の懷舊談は、後來

予等の爲に識をなさんとは思ひ設けざりし事の憂たてさよ。談笑の間、馬車池田の町に入りて、馬を杉酒屋の邊に水飼ふ。一行皆車

中を出て、蹠蹠の關節を撫し、或は酒を購ひ、或は地圖を尋ぬ。

時已に晡に近く、暮雲漸く密にして、僅かに人面を辨ずるのみなれども、前途猶遠なり、則ち御者に一銀片を與へて程を促す。道路突亢として、車輛の動搖甚だしけれども、双馬鐙を列ねて走る事、箭の如く、鞭聲と叱咤と相和して、急雨の切嘈たるが如し。

走る事、數刻にして、暮雪益々密に、穂高常念、有明蝶ヶ嶽、爺ヶ岳の連峰は、漸く藍靛の中に没し去り、僅かに白冠を蒼穹に朝したる乗鞍は、漠々として、亂雲の間に溼み、風颯々として冷かなる事、氷の如く、螢火亂點して、車窓に碎け、時に星斗の明滅する者、灰白き白樺の梢に有り、鷓聲の幽冥より、人を呼ぶが如きは、宿鳥の血に飽きたるなり、凄愴の氣人に迫り、同人をして覺えず襟を撫せしむ。

丹生子下

午下七點馬車は終に丹生子下の棧道に達す、丹生子下は高瀬川岩淵の蒼潭に沿ひて青嶂削るが如き懸崖を碎き、幅員丈に充ざる崎嶇の狭棧を通ず、若し誤つて一步を失はんか、白浪怒つて人を噛み奔騰して急渦の裡に没し去りて、又形骸を辨ずる能はざらしむ。況んや曩日の氾濫に會して、激浪輕轆し、相搏ち相摺みて、道の大半を嚙下し去りたるをや、今僅かに草を布きて、欲を補ふも道の廣さ辛うじて車躰と相如き、且つ巨石の亂配に會して、馬車頓に傾き、同人相撞突する者數次殆んど覆へらんとして、又再び靜止す、偶々車窓より俯瞰すれば、新月微かに蒼潭を射つて、車輪と絶壁との距離僅かに寸に充ざるを知り、戰慄して、馭者を止めんとすれば、好漢毅然として腕を扼して曰く、鐵臂猶存せり、客請ふ

安んぜよ、嚮に同儕某が躓嶺して、客と馬とを打して、魚腹に委したるが如きは、馬を取するに非ずして、僅かに馬に馭せられつゝ有るのみと、意氣頗ぶる軒昂たれども、同人皆閉息して言なく、然も命を天に委して、馭者の爲の儘にし、辛じて一縷の棧道を過ぐれば、冷汗背に冷きを覺ゆ。夜八時、農具川橋の名の信陽に恰當せる者を渡りて、大町の驛に入り、旅舎對山館に入る。

大町

大町は松本より越後へ通ずる驛次にして、所謂糸魚川街道なる者、市街般賑にして、人口も又夥多なるが如し。時偶々舊曆七月七日に近きを以て、戸々星を祀るの奠を備へ、笹の葉に願ひの糸をかくる者多し。乞巧奠の薄月夜に、私に二星を憶むは、抑誰家の女ぞ。

此地二星を祀る舊慣は、聊か他と異なり、番に剪採せる紙片を竹枝に點綴するのみならず、戸々の擔端に宮人の紙型を懸け、交に其數の多きと型の大なるとを誇るが如し。一聯十個皆頭顱を糸に貫ぬき、苧繩に列ね懸ぐ、状恰かも偶人の虫干に似たり。町に名物凍蕎麥あり、凍餅あり、林檎は漸く熟して、食後の用を俟つに似たり。午前八時、馬車を賃して四屋に向ふ。

木崎湖

木崎湖は大町を出て、第一次の停留場たり。湖は周回二里、藍靄漫々として、一波起らず、湖畔の山々は逆に影を浸し、炭焼く茅屋の煙の末の雲と連なるもの、鬼百合、綿菅の咲き亂れたる等、皆湖底龍城の前栽として、

布置畫の如し。

湖畔に達摩屋と呼ぶ旗亭あり、屋後は直ちに湖に落み、淺水僅かに漪を漂はして、葦葭の角ぐひ間々に、油茅の穂の漸く顯れ始め、澤桔梗の紫なるが、楚々として情を牽くを覺ゆ。

俄然として翡翠の魚を喙ばみて、翹る時、杜鵬一聲、江を横たへて飛ぶ。

時鳥聲横ふや湖の上の名吟も、偲ばれて、

杜鵬鳴くや木崎の江は、朧

と、僅かに十七字を連ねて、再び車に上る。

此邊の婦女は、猶北越の如く、皆雪袴なるものを穿つ、蓋し雪中の行動に便ならしむるが爲なれども、今は輕便なるを以て、四時常に穿つ、形袴の裳を股引にしたるが如く、頗ぶる奇とすべし。

湖畔に澤桔梗、綿菅、玉簪花、男芹、小鬼百合多く、宛ら五彩の星の燦として

良夜の光を恣にするに似たり。漸く進むに従ひて榛莽縦横たる路傍の峻崖に石松は猥々として静かに垂れ狸々袴は緑の裳を掲げ錦蘭柿蘭野鳳仙等途に方りて簇生す、蠡斯の人に驚いて飛ぶもの蟋蟀の露に咽ぶ者人をして漸く秋の近さを知らしむ。

佐野坂峠

木崎に次いで中綱の湖あり、青木の湖あり、前者は狭長にして渠をなし、木崎と青木とを繋ぐの媒たるに過ぎず。

青木は三湖中第一に位し、周回殆んど三里に近し、形頗ぶる横須賀軍港に似たるものあり、湖畔に狸藻多く、小鱗之を啄りて花の蘆ふ事頻りなり、湖に鯉鮒餘鮠を産するを以て村落に漁を産とする者あり、山中に漁家を見るは木によりて魚を求むる諺も思はれて可笑し。

湖の畔の茅屋の棟に、烏扇の火よりも紅なるものを仰ぎ、千屈菜の紅桔梗の紫に幾度か目を奪はれつゝ、漸く爪先上りの坂路に及び、車行頗る緩かなるは、所謂佐野坂峠の分水嶺なり、海拔僅かに二千六百尺と雖も、此峠を以て南北水流の境となす。これより途徐ろに降下して、澤渡飯田飯森深澤を過ぎて、始めて四つ屋に達す。白馬、鍵杓子の巨人は、點頭さて吾人を招ぐを知られども、雲低く垂れて又仰ぐ可からず。

四ツ屋

四ツ屋は白馬山麓の小村落にして、人口僅かに百餘戸、數二十軒餘に過ぎざれども、登山の客の是に來りて準備を整のふを以て、吾人の間に喧傳せらる。

旅舎に山木あり、不潔鬱ふるものなしと雖も、又他に求む可らざれば、

力めて行李を投ず。

綿レースの幔幕の裾緒に煤ぶりて觸るれば手に纏はらん計りに濕氣を蒙りたるものを掲げ薄暗き梯子段を上れば足も埋るゝ計りに柔かき疊廊下ありて左を盥室に充て右方の二三室を以て旅客に供す席は僅かに疊の目を讀むべしと雖も違棚の上屏風の撥物として埃ならざるは無し思ふに此家建築以來會て紙庵を戴くの光榮を有せざりしなるべし。

棺桶の如き風呂に薄濁りの河水を掬み入れたるものを湧かして亭主浴を報ず就いて浴せんとすれば土間に石を置きて踏臺となしたるもの塵と垢とを洗ふは則ち風呂桶の中に於てするなり上り湯の無きは忍ぶべし水さへも備ふる無さに至りては予等は路傍の小流に浴するの反つて快なるを思ふ。

斯て予等一行は鳥肉を求めて山行の食料となさんと欲し亭主に命じて購はしめんとすれども非ず漸く人を森四屋より半里に派して辛うじて二羽を獲たり之を調理せしめんと欲すれども亭主會て鶏を割きたる事なしと辭す同人則ち牛刀に代ふるに小刀を以てし辛うじて之を料理し自から凍豆腐と共に菜種油を以て煎り僅かに鹽梅し得たり。

携帯食糧

予等一行の山行食糧として準備し來りたるものは元より言ふに足らざれども或ひは参考の資ならずとせず。

- 牛肉大和煮
- 鶏肉罐詰
- ハム
- 罐詰冷肉
- 罐詰乾魚
- 鯉節
- 生胡瓜
- 福神漬
- 醬油
- エキス
- 氷砂糖
- 珈琲
- 煎茶
- 葛粉
- 日本酒
- ウイスキー
- ブランデー

其他にして藥品としては。

獨逸絆創膏、貴真膏、清心丹、寶丹、沃度保謨散。

脱脂綿、繻帶等皆不時の變に具ふ。蚤除粉の如きは夏時の旅行品としては、實に欠く可らざるものにして、吾人が睡魔を催ふす時來りて妨ぐるものは、此赤馬子の一群なり。蚤除粉無き時は、到底耐ゆる能はざるべし。

烏嶺學士

午後五時、志村烏嶺氏、雨を衝いて長野より來る。氏は健脚を以て、同人間に鳴る者、今曉箱清水の寓を發し、鬼無里を過ぎ、柳澤峠を超えて、來會せらる。里程實に十里強、凡て徒歩にして、又直ちに山に登らんとす。其健なる寧ろ驚くに堪へたり。曾て八ヶ岳に於て、擔夫を睡著せしめたるも

又此脚なりと、大いに誇る處あり。

予等が氏に此山麓に會したるは、轍鮒の水を得たる喜びあり。實に氏は高山、跋躄を以て聞えたるのみならず、客年業に白馬を究めて、鐘ヶ嶽の裏を下り、搜查殆んど餘す所なし。戸隠、舛麻や、裏白金梅や、雲間金鳳花や、氏に因りて拉致せられたるもの少なからず。其自生地の所在を知るを以て、指示を俟つ事尠なりとせず。彼の狹量なる斯學者の徒や、濫りに植物の産地を秘して、漫に濫獲を防ぐと稱す、而も自家の濫摘に至りては、殆んど言語に絶せり。若し假りに研究に資せんと欲すれば、衆と研鑽を願つは、偶々以て學に忠なるものとなすべく、栽植して而して樂まむと欲すれば、衆と共にするの快なるに如かず。烏嶺氏頗ぶる予等と説を同じうするを以て、徹宵相談じて、終に倦む事を知らず。

東道者

凡そ山にして神靈を祭祀せざるはなく、富士の淺間社を始めとして、白
 山立山、御嶽、駒ヶ嶽、大山、霧島等大小高低を論ぜず、祀きて以て山靈を崇
 からしむるを以て従つて道者と稱する登山參拜者あり、先達行者あり、
 人夫合力あるを以て、登攀に便なれども、白馬に至りては、五里の山中殆
 んど一祭神なく、一廢祠なく、宛ら太古遼寬の境に入るが如し、殆んど人
 を見る能はず、曾て佐々成政が軍を行りたるさらく、越なるものは、越
 中より鐘ヶ嶽を廻りて此處に通じたるものと稱せらるれども、二説に
 針木峠、今僅かに口碑を存するのみ、到底間道をだに求むる能はず、之を
 以て古來白馬を究めたるものは、殆んど數ふる斗りにして、予等一輩の
 推強者流か、科學者か、測量員にあらざれば、強て此無人境に入る者なし、

石窟

之を以て地に東道の業を成す者なく、僅かに山麓細野に、丸山廣太郎丸
 山嘉吉あり、南股官林の巡視を拜するを以て、呼び來りて東道を托す。

廣生言ふ、白馬山中僅かに微雨を防ぎ得るものは、山頂の石窟あるのみ、
 此中數人を容るべく、油紙を以て中より張れば、辛うじて雨水を防ぐに
 足るべし、他に葱坦、白馬尻あれども、晴夜に非ずんば、眠る能はず、然れど
 も幸ひに數日前、白馬尻大雪絡の對岸に一大石窟を發見せり、此石窟た
 るや、昔時巨盜の巢窟たりしと稱し、僅かに口碑に残れども、中頃所在を
 失して、古老と雖も知らざりしもの、今年長野中學生に扨して來り、偶然
 發見するを得たり、窟内廣き事二十人を容るべし、大雨と雖も晏如とし
 て家に在るが如しと、是に於てか予等の意氣頗る昂り、雨を衝いて出發

するに決し頭を延べて天候を覗へば、雲僅かに動きて時に小蓮華の頂
きを、示すを以て、或ひは幸にして、明旦の晴ならん事を思ひ、意益々安し。

細野

翌七日雨僅かに晴れて、風々日光を漏すを見、衆を駭つて立つ、然して
人夫は來らざるなり。
八時を過ぎ、九時を報じ、漸く十時に及として、廣生嘉吉と共に來り曰く、
天候僅かに晴を示せども、山雨猶濛々たり、公等能く登攀の勇あるかと、
衆首肯として曰く、元より然りと則ち人夫をして行李を後より擔ひ來
らしめ、手等は輕装の上に薦の糸立と稱するものを纏ひ、菅笠を戴きて、
倏忽として、徂徠する雨を冒して、細野に至り、廣生の家に入る。長野中
學生某々等三人、前夜より此處に宿して、予等を俟てり、則ち相共に、泮然

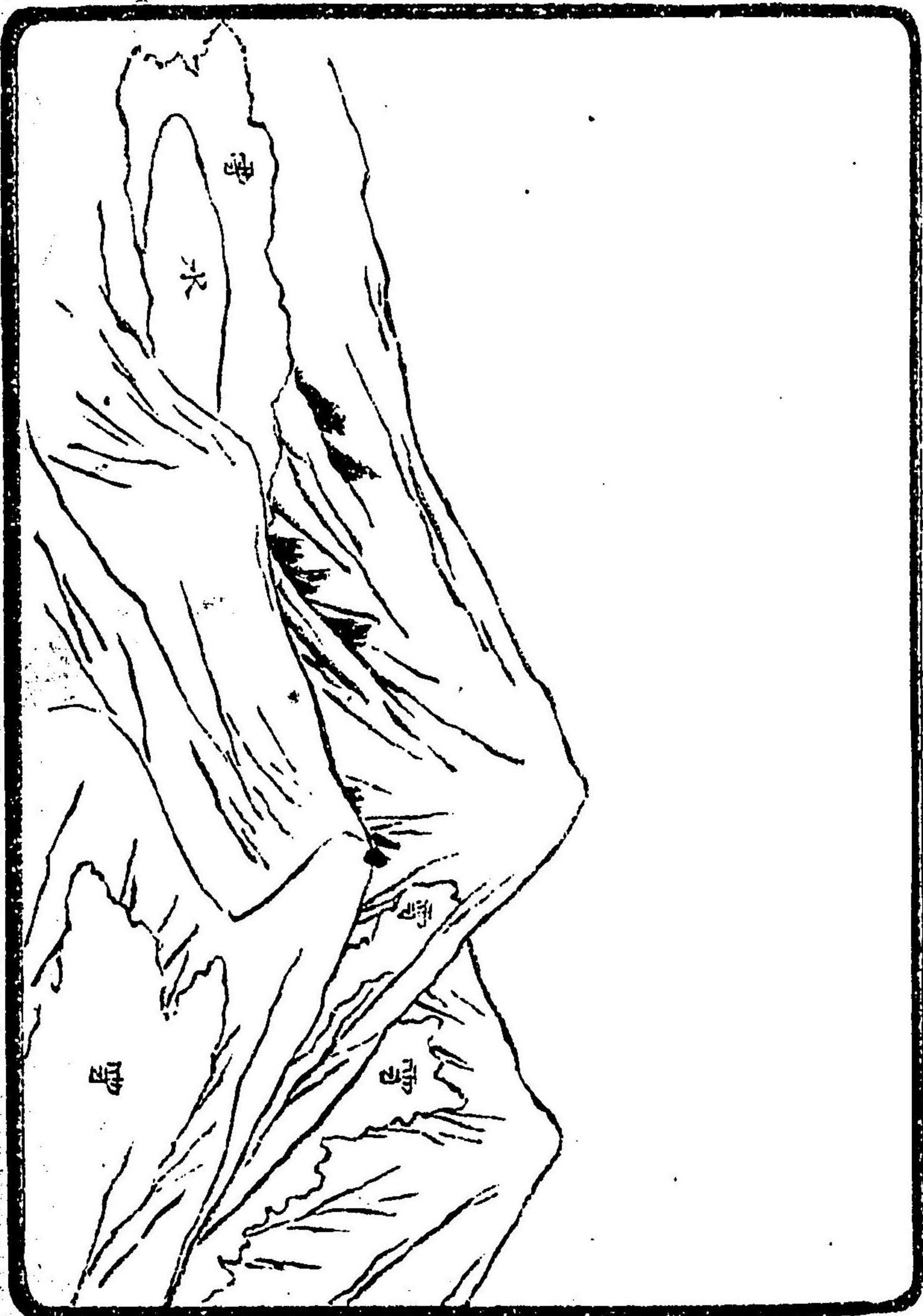
たる豪雨を衝いて出づ、予等六名、中學生三名、人夫十二人、凡て二十一名
を以て算す、意氣の壯なる想ふべし。
夜來の雨に打たれて、土流れ、石出たる狭き道路は、歩々に昂まりて、屢々
躓轉せんとしつゝ、後先して進む、曙草や武者龍膽や金光花や、桔梗や、女
郎花や、小鬼百合や、未だ笑ひを催ふさざる者、漸く紅粉の粧を凝す者、爛
開にして、花意全く濃かなる者、嬌態妍艶殆んど名状す可らず、顧眄し
て空しく去るを惜み、漸く小松の滴の玉を貫ぬく下を過ぎて、始めて遙
かに奔雷の如き響を聞くものは、則ち松川の上流にして、白馬より出づ
る北股川と、鑓が嶽より出づる南股川と、合流する所にして、呼んで、双股
といふ、此邊に、翌檜蔓多し。

双股

歸路に方りて一行を困憊せしめたる双股の急湍は、白馬ヶ嶽を當面に
 扣えて、鐘ヶ嶽は其南方に在り、杓子や小蓮華や所謂大蓮華山脈なるも
 のは、恰かも偉丈夫の肩を列ねたるが如くに並列し、下瞰して吾人を壓
 せんとする者の如し、山の大に比して、一行は蟻群よりも小に齷齪とし
 て雁行す、山にして若し知るあらば、哄然として其愚を嗤ふべし。
 廣生は衆を指揮して、川の最も挟き所を選びて橋を架す、橋と稱するも
 杉丸太を架したるのみ、一步を過れば、忽ち急渦の吞吐する所となり、了
 らんのみ、衆皆惴々焉として渡り、始めて南股の官林に入る、白馬山麓中
 の山麓は即ち是なり。

蝮蛇河原

河原の邊なる八千草の間に蝮蛇多し、偶々大いさ二尺に及んたるもの



白馬方山嶽及雪ヶ倉之望

ま や

を發見するや、烏嶺氏杖を以て其軀を押し、生ながら擒にせんと欲し、人夫をして其尾を捉へしめんとすれども、皆逡巡して進まず、蓋し世俗一度蝮蛇に噬まるれば又起つ能はずとなすを以てなり。

然して其毒は全く劇甚にして、時に牛馬をさへ殞す事あり、今や蛇毒の療法は發見せられたりと雖も、山間の僻地に於いて俄かに藥を求むる能はざれば、彼徒の踟躕する故ありとすべし。

烏嶺氏則ち人をして杖を取らしめ、自ら懐の源氏糸を脱き、堅く蝮蛇の頸を縛して右手に提げ、頻りに好標本と稱す。世に赤兒の腕を捻る者あり、未だ蝮蛇の首を緊めたる者を聞かず、其是あるは實に氏に始まると、同人皆笑ふ。

信濃撫子

左に蝮蛇を提げ、右に根堀を携へたる稀代なる登山の客は、行く／＼巖崖に沿ふて過ぎ、屢々信濃撫子の簇開するに會す。此撫子や、外容頗ぶる藤撫子に似て、花更に美なり。偶ま手折て鈕孔に挿す者あり。芬芳の氣に富む能はされども、胡蝶の誤つて來り戯るゝ者あり、若し人を代へて此景致を促さしめなば、一幅無聲詩たらずんば非ず。

葭原

業にして一行は、俚俗葭原に達す、蓋し茅茨野を蔽へるを以て名けたる者ならん。木炭の堆積場あり、茅葦を以て屋を葺く。假令其形四阿屋に過ぎずと雖も、山中屋を有するものは、只此炭小舎あるのみ、以て金殿玉樓となすべし。此小舎の後、白馬川の日蔭淵にして、激流奔騰し、巨石輕幣として相搏つ。而して深淵の上に、一巨木を横へ、以て獨木橋と

なす、彼の炭は、炭焼人夫の背により、此危橋を渡りて運搬せらるゝなり。眊を上げて遙に對岸の山麓を望めば、一道の白氣搖迷して去らず、則ち知る炭焼の作業、今や耐なるものにして、其邊なる蝸屋は、實に人夫の住めるを。彼等の徒は多く、越中より來るものにして、融雪後より秋初に至る迄、人跡稀なる此山中に分け上り、炭を焼くの外、又他事を知らず、今此處より見ゆる小舎には、只一對の若夫婦あるのみ、と偶ま、薦垂の戸を排して、其婦は出て來りぬ、窃に双眼鏡を取つて望めば、年齒二十四五容は美ならざれども、白面にして、皓齒無雜作に束ねたる髪は、油を用ひずして翠に輝きぬ、眉緩やかにして、眊の險しからざるは、其分に安んじて、天真を樂しむに因るか、彼は市井の人の如き、樂しみはなかるべきも、又苦しみを知らざるべし、臙脂や、紅粉や、華鬢や、美衣や、彼等に在りては、未だ會て念頭にだも入りし事なし。彼は其良人が樵る間に、其食を炊

ぎ其衣を濯ふて、又醒醒の要なし、良人と共に食し、良人と共に笑ふの外、朝夕友とする者は、飛禽走獸のみ、時に數月に渡りて、餘人を見る事なけれど、彼は晏如として不安の色なし、眞に羨むべきの境遇ならずや。

晝餐

東道者丸山令を傳へて晝餐を取らしむ、蓋し此處清流の潺湲として流るゝを以てなり、四屋山木旅舎より携ふる所の握飯は、量甚だ少なけれど、俄に如何ともなす可らず、牛肉の大和煮、ハム等を以て僅に之を補ふ、或はサンドウイッチを携へたる者あり、用意多とするに足る。

沼池

流れに口嗽ぎ、烟草に涼を呼びて、いざとて葭原を出て立つ、同人流れに

溢める木の根に手巾を結びて水中に浸し、誇り曰く、歸來の時に際すれば、漂白雪の如くならん、又西洋洗濯の要なしと、盥んぞ知らん、他日水流漲り落ちて、手拭は木の根と共に奪ひ去られんとは。

一行は頓て沼池に至る、此地は地勢凹字形をなし、古へは常に水を湛えたりしが、中頃其一角突如として缺損し、日蔭淵の上流に陥りたるを以て漸く干瀉となり、僅かに俚俗の名稱を存するのみ。丈を没する叢葎は之より始まる。客年鳥嶺氏が戸隠升麻を獲たるは、此邊にして、棧道の此處彼處には、淫羊霍、矢車等蓬蓬として生じ、朽葉の堆積せる間を點綴して、曙縹子蘭多し。

偶々鳥嶺氏挺て、峻崖を探り、忽ち一莖の戸隠升麻を穫たり、衆後先して摸索し、途甚だ抄らず、人夫行を促して曰く、戸隠草は他に産地あり、抽き來りて献ずべし、乞ふ速かに進め、若し躊躇して途に晡なば、行歩甚だ

困難なりと、人夫の言俄かに信ず可らずと雖も、衆捜しあぐみて終に此地を捨て去る。

熊の穴

丈なす若竹の間に丈餘の蕎麥葉貝母と巨大なる水芭蕉との參差たる所を衝き、天候俄に變じて陰雨暗濤として覆ひ、冷氣面に當ると思ふや、霹靂天地に震ひて大雨沛然として臻る、頼む大樹の蔭もなければ、一笠何時しか破れて雨水は腹背を濡ふし、腸迄も濡り盡しぬ、煙草も潤ひ、燈火も用をなさず、衆相顧みて自失するのみ、然も意氣更に昂りて、行歩頗ぶる速かなり、斷崖絶壁と雖も、夫れ能く吾人を拒まんやと、壯語盛んに聞え、雷雨更に烈し。忽ちにして轟々たる一大瀑布の音を聞く、雷霆も爲に其響を失すべし、

丸山生曰く、これ熊の穴の急湍なりと、熊の穴は白馬山上大雪溪の懸水を一所に集め、巨岩の關門より噴出するものにして、山の奇と石の奇と、水の奇とを一所に集めたるもの、所謂壯美の至域を盡すものにして、口語る能はず、筆記す可らず、二三子雨を冒して、峻岩の上に眼鏡を立て、其奇景を收む時に、虎の怒るが如き巨巖の上に、異卉あり、紅玉を瓣となし、綠晶を葉となし、岩下の鞞鞞を知らざる似して、微笑す、これ小鬼百合の醉を吐くなり、鬼の名の嚴しきに似ずして、花の可憐なる人をして捨て去るに忍びざらしむ。而して熊の穴の名は、洞門の形より言ふと雖も、秋晩の候、巨熊の山葡萄を涉りて徘徊するもの、屢々此流れに渴を慰するより、此名を獲たりと。憶ふ古英雄のザラ越を過ぎて、此處に來るや、意氣天を衝くと雖も、人馬困憊して、又進むべからず、僅かに行糧を開きて、一掬の水に喉を潤

したるは恐くは此激湍なりしなるべし、水勢急馳又古への水に非ざれども、岩石苔蒸して依然たり、吾人を見て語らむとする者の如し。

白馬尻

須臾にして雷鳴遠く去り、雨少しく止む、衆急ぎて白馬尻の巨巖に到らむとし、呼應して進む、青嶂のところ、小谷波あり、潤葉瑠璃の如く、翠滴、らんとす、漸く牛扁草を見、谷酸漿を見、衣笠草の大いさ斗の如きに驚き、始めて巨石の狼籍たるに會す、これ則ち白馬尻の露宿所たりと雖も、今は殆んど大澤の如く、雨水漲りて石の半に達す。而して有名なる大雪谿は則ち之より始まる。

大雪谿

予は屢々富士に登り、信飛の連巒に入り、所謂萬年雪に逢著する事一再にして止まらざれども、未だ白馬の大雪谿の如き偉觀に接したるは非ず、衆皆此奇觀に接して俄かに閉息するのみ、鵬舌予の如きを以てして、暫時は語を發する能はざりき。

大雪谿は上葱坦の邊より、一氣にして懸下するもの、實に兩山相蹙まれる急勾配の大谿間を埋み盡せり、長さ一里と稱すれども、恐くは二十町許りなるべし、幅廣きは二百間、狭きも五六十間を下らず、所々大缺陷を生じて、溪流顯る、其断面は七八尺より丈餘に達す、雲霧徂徠し、異卉續紛し、又人寰の景に非ず、正に山靈の烟の如く、磅礴する靈域なるべし。ちぎれ雲の眉間を掠めて走るもの、或ひは人の如く、或は馬の如く、鬼形をなせる者、羽翼を生ぜるものなど、山より山へと渡り行きて、予等一輩の闖入を急報するもの、如く、草は風なきに動き、岩は口なきに嘯く。

大魔風

丸山生同人を促して曰く、一行の宿なる大巨巖は雪路の他岸に在り、雨降らざるに乗じて渡らざれば危険ならん、況んや天漸く晴んとするをや、と卒先して進む衆之に跟随し、競々として斜めに雪路の上を行くに、水流僅かに隙を没して冷かなる事刃の如く、冷氣森々として肌に乗せんとして、忽ち大魔風至る、其氣凛然として温かく、生温き事微温湯に浴するが如し、蓋し雪路上の冷却せるに反し、空中の温暖なるが爲に、此魔風を生ぜるものなり、所謂腥臭き風とは之を言ふなるべし、或ひは山靈の一行を脅かすものに非ずや。而して砂礫の間に咲き出づる大櫻草や、白根葵や、白馬千鳥や、將又丁子菊の粉緑や、白馬淺葱の織碧や、偶ま人を眩する者にして、若し其美に溺れて濫りに近づけば、雪路忽ち陥落し、

呀然として人を吞噬すべし。

巨巖

衆相戒めて雪路の上を横り、漸く對岸に達し、横さまに懸崖を攀づれば、葭草の薙々として静かに垂れたるが、些やかなる花を著けて、草の數にも漏れずと簇生せるあり、此邊榛莽狼藉して、行步頗る艱く、竹の如き虎杖笠の如き衣笠草に道を拒まれて、倏忽として徂徠する雨を冒しつゝ、甫めて大巖罅の所に達す。巨巖は長さ二十間、高さ一丈五尺、其缺けて罅を爲す所、蓆十枚を布くに足るべく、優に一行を收容するに足る。眞に白馬山中唯一の好宿舎なれども、此宿舎たるや、岩を傳ひて頭上に墜ち來る消滴瀧の如く、全く露天と異ならず。罅内に水充ちて沮洳入る可らず、人夫等相圖りて一方に

排水をなし、一方に草を布き或ひは生木を切りて火を造らんとす、而も大雨中なれば、作業甚だ振はず、漸くにして米を炊ぐに至れり。

雷雨

白馬菊の汁の實と、携帶行糧とに空腹を慰し、衆火を圍みて語る、須臾にして暗雲漸く閉し來りて、白かりし天蓼の葉裏も見えず、霧とも雲とも分ざるもの、漠漠として乾坤を閉し、世は永へに夜暗の裡に葬り去られんとす。點々螢光の如き火光は、今將た何等の用をなすべくもあらず。困憊と徒然に苦しめる一行は、或ひは火を圍み、或ひは桐油紙と毛布とを被りて眠り、或ひは燭を取りて腊葉に従がふ者あり、放談壯語の聲漸く稀に成り行ける折しも、電光一閃吾人の腸を貫いて、おどろくの雷鳴は、柱維も砕けむ、斗り、沛然たる雨は、予等が屋とせる巖石を穿ちて百

聯の懸水となり、漉々、濛々、又人語を辨ず可らず。然れども間斷なく續發する電光によりて、幸ひに黑白を識別するを得、相見て苦笑するのみ抑そも雷鳴の有る處は、此大巖窟より下る事千尺以下に在り、閃電の如きも、實は下より逆まに射出するものなれども、肉眼には横様に放射するが如くにて、其形容頗ぶる奇なり。

洪水

絶間なき雷雨に浴しつゝ、衆何時しか眠りぬ、則聲雷よりも高し、憶ふに夢は葱垣の華胥國に遊べるなるべし。頓て午前三時とも思しき頃上方の瀑布一時に水勢を増し、岩石砂土を流し來り、奔馬の勢を以て、予等の岩窟を衝き、火は燃えながら流れ、行李は輾轉しつゝ、走る、一行相呼びて暗中を摸索すれば、全身皆濡れ、服の重き事、鎧の如し。若し蜘蛛せば

山上に在りて溺死者を生ずべきなりと相見て笑ふ。吾人は嚮に天の無情を恨みたれども此處に至りて大いに謝さざる可らざるは此夜季候の頗ぶる温暖なりし事なり若し普通の温度にして此の如く雨水に濡れながら天明を俟たば一行殆んど生くる者非りしなり幸ひに天意懐柔なるに由りて談笑自若たるを得たるは又所謂天佑なるものか。

天明

奇怪なる夜は明けぬ然れども雨師依然として猛威を逞しうし風伯頻りに和して山は鳴り岩は震へ雲脚奇にして神行頗ぶる疾し丸山生曰く此凶兆あり到底登山する事能はず若し之を強むば人夫の中命に従がはざる者過半ならん如かず細野若くは四屋に下りて再舉せんにはと衆其已む可らざるを知れども皆限りある日子を割いて遠く來りた

るもの一度下山して天候の恢復を俟ち再舉を企つるが如きは到底行ふべきに非ざれば意頗ぶる拒むと雖も東道者の言捨つ可らず如かず雪際の上に至りて頂上の雲脚を見而して後去就を決せんと則ち結束して出づ雨滂沱として笠を搏ち潑々として聲あり。

大缺陷

衆相戒めて雪際に至れば驚くべし前日徒跽したりし所は一夜にして全く陥没し怒流現れ岩石躍り狂ひ一行を見て呑噬せんとする者の如し況んや頂上より雪田の上を流るゝ水は疾き事矢の如きをや予等の蠻勇を以てしても到底上る能はず即ち斷然他日を期して下山するに決し漸く他岸に達して歸途に就く足の踏む所得撫草あり白馬淺葱あり前後相抽きつゝ漸く中山澤に至り雨始めて晴れ日光微かに照す或

ひは再び踵を廻さんといふものあれども絶頂の雲脚猶險悪なるを以て晴を一時の變兆となし意を決して更に下り途上無數の溪流を過り幾度か躑躅しつゝ終に沼池に至る。

戸隠升麻

戸隠升麻は強て觀賞すべき植物に非ざれども其珍奇なるを以て重んぜらるる嚮に信の戸隠を漁り盡し天下又此異草を獲る能はずと稱せられしが予等の一行沼池の邊の巖崖に於て之を獲たり時に花葉に謝したれども一根數莖にして高さ尺餘なるもの其裏白き葉を翻がへして蕭條たり其數五六十なるべし一行は後に登山する者の爲に其半を殘し各自三四株を收めて去る若し後年登山する者予等の殘存せしめたるものを採り盡しなば更に上る事二町余にして此草の一大叢を發見

すべし其數數千百莖簇々として山隈を蔽ひ白き葉裏を示して風と嘯くに會せむ。

氾濫

一度晴れたる空は再び曇り葭原に至る頃には又雨となり之に加ふるに寒威凜烈又昨夜の比に非ず漸く南股に達して忽ち鎗ヶ嶽川の氾濫に會す急流怒號して岩石を流下するもの其音百雷の如く到底橋を架す可らず空しく川に臨みて惆悵するのみ。偶々對岸に豆人あり巨石と巖巖とに蟻附しつゝ漸く近づき來たるを見れば一老翁の篋笠を被り滂沱たる雨を衝いて來る者意氣頗ぶる壯なり老翁必竟如何にして此急湍を徒涉せんとするか。擔夫の中進んで巨巖の絶巔に登り徒涉點を發見せんとする者あり之

を見て呼んで曰く、丸山老翁來ると、蓋し廣生の父にして、夜來の暴風雨
 に一行の安否を念とし、自ら來りて急湍を徒渉せんとするなり。
 時に衆皆水濤に立ち、廣生大呼して曰く、止めよ、渡る能はずと、然
 れども水聲喧嘩して通ぜず、即ち僅かに乾きたる紙片を搜り、明朝を待
 つて渡河する企劃を略記し、石を結びて之を投ず。
 老翁受けて之を読み、莞爾として首肯し、漸く踵を廻して去らんとする
 に、臨み、予等同人の中、業に凍死に瀕せんとする者あり、泮然たる大雨を
 浴びて、脊を巨石に凭せつゝ、昏昏として眠らんとす、衆大いに驚き、其肩
 を搏ち、顔を撫し、頻りに睡魔を逐はんとす、れども能はず、若し一度昏仆
 せんか、終に再び起つ能はざるを以て、衆相擁して崎嶇たる山路を登り、
 幾度か困頓して、葭原に來り、雨に濡れたる生木を斫り、辛うじて火を造
 りて、暖を取るに及び、始めて全く蘇するを得、愁眉始めて開く、然も其人

は依然として凍死せんとしたるを知らず、何が故に予の眠りを覺した
 るかと、頬を膨らして、嗷々せり。
 擔夫の中、又危地に瀕したる者あり、巖に懸水を横りて、足を失し、既に急
 潭に落下せんとし、僅かに傍人に助けられたる者、意氣頓に沮喪し、又
 昏睡の狀に陥り、たれども、火によりて辛うじて活くるを得たり。
 當夜は實に飛の乗鞍に於て、執持者某の凍死したる時にして、寒威の凜
 烈なる言語に絶し、八月三伏の候に在りて、終夜火を擁するに、火も又凍
 んとするが如く、衆殆んど眠る者なく、黎明を待ちて、再び南股に至れば、
 丸山老翁壯丁四五輩を提げて、業に待てり、焚火の烟は遙曳して去らず、
 山より山へと、鳥鵲の橋を架したるが如く、奇觀言ふ可らず、漸く架橋工
 事の完成を待ちて、終に彼岸に達するを得、衆皆喜色あり、顧みて、山嶺を
 仰げば、濃霧漠々として、深く神秘を鑰し、下凡の爲に、山容を示す事を忌

む者の如し。

費用

後の登山者の爲に當時の費用を記載するも強ち無用の業に非ざるべければ左に記憶の儘を擧ぐ。

八月五日

- 金拾貳圓參拾五錢.....(自上野至明科).....五人分三等車賃
- 金七拾五錢.....(輕井澤).....五人分辨當
- 金壹圓.....(明科瀨亭).....五人分番麥茶代
- 金三十錢.....(自明科至押野).....人力車二輛
- 金二圓七十錢.....(自押野至大町).....馬車賃
- 金貳拾錢.....(池田町にて求む).....押野馬車屋茶代
- 金一圓五十六錢.....(全).....酒三升二合
- 金十二錢.....(全).....信濃全圖

小計金拾九圓八錢

一人金三圓八十一錢六厘

八月六日

- 金十錢.....各立場茶代三圓
- 金五圓.....(大町對山館).....五人分宿料茶代
- 金三圓.....(自大町至四屋).....五人分馬車賃
- 金六錢.....各立場茶代三圓
- 金二十二錢.....(四屋にて求む).....牛肉罐詰
- 金十錢.....(全).....菓子
- 金十一錢.....(全).....葛粉
- 金八十五錢.....(森にて求む).....葱五枚
- 金十二錢.....(全).....鱈乾物
- 金五錢.....(酒樽より酒を移すに用ゆ)瀝斗

小計九圓五十一錢

一人金一圓九十錢二厘

八月七日

登山中に付支出なし

八月八日

八月九日(同行の中一名は四ツ屋に止まり四名出發歸途に上る)

金八圓八十錢.....(白馬登山人夫).....人夫九人分賃金

金六十錢.....(南股川にて).....架橋手傳謝儀

金六圓五十錢.....(山水旅館).....五人分宿料

金一圓.....(山水旅館).....山水旅館茶料

以上五人分(一人三圓三十八錢).....四人分荷馬車賃

金一圓五十錢.....(自四屋至大町).....

以上四人分(一人金三十七錢五厘)

小計拾八圓四十錢

一人三圓七十五錢五厘

八月十日(同行中一名篠井にて別れ三名歸京)

金一圓七十六錢.....(大町にて土産).....四人分氷餅氷蕎麥

金四圓四十五錢.....(大町對山館).....四人分宿料

金一圓.....(全).....茶代

金二圓二十錢.....(自大町至押野).....四人分馬車賃

金五錢.....立揚茶代

金五錢.....(自押野至明科).....押野馬車賃茶代

金三十錢.....(明科茶屋).....小荷駝馬二頭賃金

金二十錢.....茶代

以上四人分(一人金二圓五十錢二厘五毛)

金七圓四十一錢.....(自明科至東京).....二人分涼戸賃

金三十六錢.....(篠井驛にて).....三人分辨當

金六十錢.....(高崎驛にて).....三人分辨當

以上三人分(一人金二圓七十九錢)

小計金拾八圓三十八錢

一人金五圓二十九錢二厘五毛

合計金六十五圓三十七錢

合計一人金拾四圓七十六錢五厘五毛

第三回登山記

烏嶺

上

朝に白馬の雪を噛み夕に白山の雲に嘯き、一たび立山の巔を極め猶ほ佐波が島に罪なくして配所の月を見んとは、今春以來の計劃にて準備略整ふ。然るに待ちに待ちたる四旬間は連日の降雨にて以上の計劃全く晝餅に歸す實に痛恨に堪えざるなり。然れども余が最も崇拜する白馬嶽に第二回及第三回の登山を爲すことを得たるは實に意外の幸なりしなり。第二回の登山は曙山氏等の一行と行を共にし、白馬尻の膏雨に一行二十一名將さに死地に陥らんとし、溪流悉く怒漲し、中山の獨木橋瀧の澤の徒涉日蔭淵の深潭に幾度の膽を冷やし、南股の奔湍に歸路を斷たれ、一夜を炭小舎に明せし困苦に至りては、余が始めて

遭遇せし辛き経験なりと。其の詳細に至りては、第二回の登山記に詳なり。

第二回登山の失敗に遺憾遣る方なく、捲土重來必ず其の目的を達せんものと、八月下旬第三回の登山を企つ。意外……意外。

余等の登山に對して山麓村民の大反對。

村吏警官に依頼交渉せしも要領を得ず、遂に他村神城村より、人夫を雇ふて登山す。

嗚呼第一回の登山には鑿ヶ岳天狗ビシの崖下一行四名九死の衝に彷徨し。第二回の登山には一行二十一名、白馬尻の洞中暴雨に難み。第三回の登山には未だ登らざるに山下村民の大反對を買ふ、若し夫れ……第四回第五回……第十回の登山を企つるに於ては何物が何處に於て如何なる障礙をなさんとするか。第二回の登山は第一回より第三

回は第二回より幾多の経験を経て、今や白馬及鐘ヶ岳に於ける奇草の所在、山中の地勢等、明晰に腦裏に畫くことを得るに至れり。登山回を重ぬるに従つて、白馬嶽が益々學術上の趣味に富めるを覺ゆ。其の登山の趣味に於ては、一度登らざるは愚、二度登るも愚なる俚諺ある富士山等とは、日を同じうして語るべからず。O氏及一名の人夫と共に早朝、長野を發し、十一里の險道をたどり、夕刻北城に達し、山木旅店に投ず。直に細野より案内人を招ぎ、人夫數名雇入の件を托せしに、村民が登山者に反對するの故を以て到底人夫を雇ふこと能はざる由にて應ぜず。余大に訝り、其の理由を糾し、事の顛末を知るを得たり。他日登山者の參考として、其の概要を記さん。

古來白馬嶽山下の村民は、嶽(村民は白馬嶽と云はず)普通嶽或は西嶽と云ふ)を尊崇すること神の如く、恐るゝこと惡魔の如し。若し夫れ

人の此山に登り、神威を冒瀆するものあれば、山靈大に怒り、嶽暴れありと稱して、相戒めて登山することなからしむ。人智漸く進みたる今日にありても、之を迷信するもの尠からず。然るに近來登山熱の盛なる、植物採集家の近年頻りに登山するを見て、彼等は頓不不快を感ぜしもの、如し。八月初旬、余等一行の登山するや、近年稀なる暴風雨、彼等之れを見て、平素の迷信を深くせしならむ、其の後連日の降雨、溪流怒漲、河水汎濫、田畑其の害を被るもの甚だし、如斯して不良の天候、恢復せざんば、禾穀稔らず、飢饉を見ること必然なりとし、山下の細野、四ツ屋、大出、蕨平、深澤、新田、鹽島、などの字々、皆各鎮守の社に集まり、天氣祭(大旱には雨乞ひと稱して、降雨を祈り、霖雨には天氣祭と稱して、晴れを祈るは、此地方一般の習俗なり)をなし、天の晴れんことを祈る。時に白馬山上に數名採集家及細野人夫の滯留せるありしかば、之れを聞きし村民等

大に怒り、各字より總代を出だし細野に至り、他地方人の山上に在るは如何ともすべからずと雖も、山下細野區民の山上にあるは不都合極まり、我等は日々幼を携へ老を扶けて村社に祈ることゝに日あり、然るに天の晴れざる所以の者は、彼等山上に滞留するものあるが故なり、速に下山せしむべし、又他に登山者あるも、細野區民の案内するものなくば登ること能はざる山なるが故に、今後は一切案内者の登山を禁ぜられたしと申込めり。細野區に於ても、之に同意し、人夫をして下山せしむべく、二名を派し、又一切登山せざる規約をなし、若し之に背くものあらば相當の制裁を加ふることゝなせり。山上に登りし二名の者は命を傳へて人夫を下山せしむ、されば山上にありし人々は非常なる困難に遭遇せしと聞く。

以上の事情の明なるや、直に人夫を依頼するの不可能なるを見、役場吏

員區長警察員等と交渉なし、百方人夫を得るの方法を講ぜしも、遂に要領を得ず、其の間空しく旅宿にありて數日を費せり。

余は既に第二回の登山をなし、路の嶮夷山中の地勢に通ずること案内者等に劣らざるを以て、唯單に登山するのみなれば人夫を要することなし、故に止むを得ざれば、單身にても必ず登山し、如何なる事情あるも決して山下村民の迷信を助長せしむべからずと決心せり。

然れども、單身にて白馬を上下するが如きは、徒らに危険を犯すのみにて得るところ尠なきを以て、百方人夫を求め、遂に隣村神城より數名の人夫を得たり。登山の日は實に山下村民が大厄日として恐るゝ、二百十日の當日なり。此機會に於て二百十日に白馬嶽に登る壯は壯なりと雖も、亦暴擧たるを免れず。村民余等の登山を見て喜ばず、田畑にあつて鋤を執る者、路上相遇ふ者、皆一種不快の眼光を以て余等を目送

す。時に余に微恙あり、頭痛甚だしく、全身惡寒を覺ゆ、誠に内憂外患交々起り、余は實に憂心忡々たるものありき。

中

午前五時四ツ屋を發し、六時二股に達す。第二回登山當時の面影見るべからずと雖も、水流矢の如く到底徒渉すべからず幸に村民の架せる假橋ありしを以て容易に渡るを得たり。余等は四ツ屋より間道を經て直にこゝに來り、人夫は鍋其の他の用具を借らんが爲めに細野に廻はりしかば、大に後れ待つこと二十分、其の影だに見えず、三十分を經るも其の氣配だになし。此に於て多少の疑惑を生ぜり、山下村民の大反對あるにもかゝはらず、強て登山することにしあれば、人夫は細野邊に於て或は意外の故障に遭遇せしにあらざるかと、時に草刈男の來るに

遇ふて人夫は直に後方より來る由を聞き、大に安堵し、其の來るを待たず出發せり。落武者は薄の穂をも恐るとぞ、余等も何ぞ夫れ神經の過敏なる。

口元ノ瀧の澤、奥ノ瀧の澤、皆平常に復したれば、第二回登山の際、身命を堵して此所を横過せりと云ふも誰か之を信ぜん。又其の當時、南股の溪流に歸途を阻まれ止むを得ずして岸に立てる喬木を倒して橋となし、渡らんとして其の恐ろしさに衆皆戰慄せし日、陰淵曩日の奔湍激流、其の名残をも止めず、今は碧潭寂として、油の如し、假へは颶風一過して、一葉も戰がざるが如く、或は醉狂人が暴れに暴れたる後、疲れ果て、昏睡せるが如し。例の炭小舎附近に至れば、雨中に焚火して暖を取りし、ときの櫛あたり散亂し、四近の夏草、右往左往に蹂躙せられ、其の狼籍たる有様には、當時の慘狀を忍ばるゝ。

早や幾度か通過せし喬木帯一草一木皆吾が知己。熊ノ穴にて暫時休憩し午前九時白馬尻に到る。數日來否數十日來の陰雲全く晴れて二百十日に當る今日珍らしくも日本晴の好晴快云はん方なし。露に霑へる夏草一しほ緑を増し永く雲霧に鎖されし高嶺の花一時に開花し満山錦繡の如し。特に濕潤なる三伏の炎暑を経しことなれば谷間の氷雪著しく減少し永く雪下に埋れたる高山植物數日を出でずして新霜將さに來らんとする今日此頃始めて嫩芽を生じ花蕾を見る、其のいぢらしさ偏に吾人の同情を牽けり。今夏此白馬尻に一大石窟を發見せるを以て吾人は好露宿地を得たり。白馬尻より頂上までは、一氣に馳せ登らば四時間内外にて達することを得べし。然れども余等は、悠々大殘雪の兩側を精探せんと帽箱を壓して聳ゆる絶壁にムシトリスミレの果實を採り。將さに崩れんとする怪岩の下清泉の湧出

するあたりオホサクラサウの満開せるを見る其の艶麗比すべきなし。本邦産ブリンムラ屬中ヒナザクラ、ミチノクコザクラ、エゾコザクラ、ナンキンコザクラ等あれども何れも多くは小形可憐なるを以て高山植物中の珍とせらるゝものなるに獨り此オホサクラサウに至りては其の雄大なること前數者の比にあらず全長尺餘に達するものあり。彼等に可憐の風あらば是に壯嚴の姿あり。本種は高山植物中活着開花容易にしてよく結實す。之を人園に移して下界の風土に適應せしめば園藝植物の上乗なるものを得ん。八月中旬に花を見たるノウゴイチゴも今は紅頬を着くるを見る採て味ふに其の味清楚淡泊。嗚呼高山植物は其の花の優雅高尚なるのみならず其の果實の味も清楚なり此天界の樂園に逍遙し此果實に生をつなぐを得ば必ず不死の仙たるを得ん。

此途中に於て又氷河の擦痕と思はるる痕を岩石の面上に残せるを見たり。午後一時残雪の殆んど盡きんとするところより直に葱平に登らんとして、残雪の龜裂壞崩甚だしく到底葱平に達すること能はず。即ち一二町後退して右方の崖地を横切り漸くにして葱平に達するを得たり。シマイケアケボノサウ、チシマギ、ヤウ、イハギ、ヤウ等は盛に花を着けたれども、ユキワリザクラ、ナンキンゴザクラ等は其の花既に謝し、クロユリ、シナノキンバイ、ハクサンイチゲ等皆結實せるを見る。氷河遺趾の附近を過ぎて、ツクモグサの果實の實にや白頭翁にも似たるを見る。石室に達せしは午後五時半なりき。石室は頂上より七八町稍々低凹の處にあり、畧東西に長く南北に短かさ長方形をなし、四方石を積むこと高さ約四尺許上に板屋根を葺き、内に十人位を容るべし、中央には三尺四方形の爐あり、一面に偃松の小枝

を敷きつめたり。水は小舎より西方に下ること二三丁滾々として湧出す斯くの如き高山の頂にかくの如き湧泉を見るは實に異とすべし。多くの高山に登れば常に水の缺乏に苦む、八ヶ岳の如き淺間の如き、槍ヶ岳、大天井、常念、皆然らざるはなし。されば此等の山上に露宿せんとせば、或は溪間に下りて雪を探るか、或は特に水を運ばざる可からず、其の不便と困難とは實に名状すべからざるものあり。然るに獨り此白馬にありては、水の便利到るところにあり。人夫はいたく後れたる模様なれば、或は頂上まで來る能はざるべしとの懸念もありしかば、偃松の枝を集む。白雲漸々人圈を鎖し、夕陽將さに西方に没せんとする光景のあまりに雄大壯麗なれば、吾等は石室の上方小高きところに登りて、しばし此大景を眺めぬ。日没後に至るも人夫來らず、再三小舎より出て試みに大

聲之れを呼ぶも、只木魂に響くのみ、黒暗々たる夜は先づ人圈を包みぬ、
 遠山を隠しぬ、斯くて天地混沌。
 既にして立山の頂に、淺間のほとりに、槍ヶ岳の空に、一ツ二ツ三ツ四ツ
 閃々たる星光を見出だしぬ、遂に満天無數の星辰。
 身は人圈を脱して天に近けること一萬尺、列宿吾れに親むかとな覺え
 らる。

八時を過ぐること十五分、遙かに人の呼ぶが如き聲す。第一聲は幽か
 に、第二聲、第三聲、確に人夫の聲あり。即ち小舎を出て、高く呼べば彼
 れの答明かなり。石室の前に火を焚きて信號とす、三名の人夫は暗中
 をたどり漸く石室に到る、一同大に喜び直に晩食の用意をなす、九時半
 食事を了り、十時半皆焚火の傍らに眠る。
 夜半獨り石室を出づ、朦氣晴れて蟻埵の如くに見えたりし山々、實に夢

よりも淡はし、星の光りの達する限り、視力の及ぶきはみ、遙かに遙かに
 遠く遠く西方の下界にあたり、幽かに火光を見る。

嗚呼何物……何物……火は一點の火にあらず、光は一團の光にあらず、
 細く長き縦横の光數條、細きこと縷の如し、時に斷雲の遮ぎるものある
 にや、或は明、或は滅、此眼前の光景に、吾人は沈靜、安慰の念あり、幽邃、深遠
 の感あり、實に意慾の繫縛を脱して、無念、無想の境に逍遙遊を爲しぬ。
 此火光は一萬尺の高處より見たる富山市街の電燈。

下

翌日午前三時半、頂上より日出の光景を見んものと、防寒の用意をなし
 て頂上に向ふ。寒威凜烈、一同齒の根も合はず、頂上にありて待つこと
 多時、次第にうすれ行く東天の星影、二ツ三ツ四ツ。

浜中渾沌の所徹かに紅く、依稀として五彩をなす、益紅くして愈明かに、
 紅色次第に金色となり、遂には數千道の光箭光芒陸離として天に放射
 せる様實にサブライムなり、ビエーチフルなり。次に赫々たる日輪躍
 如として昇る、天地之より清明下界を蔽へる雲の海、銀霧悉く紫金色の
 覆輪を着く。高山の頂に於ける日出の光景、天地何物か之に比すべき
 絶大觀あらむや。余は三枚の撮影をなす、一は赫灼たる日出の光景、一
 は白雲の怒濤ひた打つ鐘ヶ岳の頂、一は紫翠千堆漂渺透迤たる立山の
 連峰。
 六時石室に歸り、七時朝飯を了り直に先頂上附近をあさる。目に觸し
 ものは、ウラジロキンバイ、シコタンサウ、イハウメ、ツクモグサ、オコマグ
 サ、フジハタザホ、イハツメクサ、ウルツブサウ、ミヤマシホガマ、イブキジ
 ヤコウサウ、チシマキ、ヤウ、イハキ、ヤウ、ヒメカラマツ、多くは果實を

着く。シコタンハコベ、チシマセンブリ等の珍種を採集す。ムカゴユ
 キノシタ、ヒメハナワラビ等は白馬にありても稀品と稱すべきもの。
 ヒメハナワラビはへビノシタとも稱し、瓶爾小草科に屬すれども、本邦
 にありては既に知られたる産地多からず。元來瓶爾小草科に屬する
 ハナワラビの種類は、本邦産八、九種あり。就中本種は稀品にして頗る
 可憐なるものなり、ハナワラビと等しく多年生草本にして、一個の實葉
 と裸葉とを着く、裸葉は羽狀複葉をなし、各小葉扇狀に開張し、左右に並
 列せる様得も云はれぬ趣味あり、高さ三寸内外あり、本種は活着頗る容
 易なるもの、如し、白馬運峯にありては本種の産地として知られたる
 は、此山頂及び葱平のみなりしも、余は他に二三個所の新産地を發見せ
 り、其の形態の小なるが故に見出すこと頗る困難なり。自生地は皆陽
 向の斜面にして排水最も佳良なる所なるが故に瓦蓋の内に養はんと

せば、此點に注意を要す。ヒメハナワラビの名稱を聞くときは、何人も直に可憐なる小草なることを想像せん。然るに本種にヘビノシタなる異名あり、ヘビノシタなる名を聞くときは、眼に異光あるくちなわが閃々たる紅舌を吐き、吾人の眼前に頭をもたげたる恐ろしき光景を聯想せざるを得ず、此可憐なる小草に此恐ろしき名あり、名の實に協はざることを甚だしと云ふべし。

頂上及び石室附近の採集を了り、九時氷河の遺跡を探る。葱平上方大残雪の傍ら數ヶ所に残れる滑澤鏡の如き氷河の擦痕、今も猶ほ昨の如く判然として残り。嗚呼、二萬五千年前の氷河の遺跡、今嚴として見ることを得、未來永劫又消ゆることなけん、人は多く世に縷の如き痕跡をも残す能はずして、醉生夢死するもの比々皆然らざるなし。余はひたすら自然力の偉大なるに驚き、轉た人生のはかなさを感じず。

之より、鐘ヶ岳の裏面に向ふ。此日も朝來快晴なりしを以て、採集頗る容易なり。然れども時期遅れたるを以て、半ば枯死せる者多く、見る影もなき有様なるもの多し。鐘ヶ岳の裏面に到り、クモマキンパウゲを採集す、多く果實を着く。タカチキンパウゲの數株を探る、タカチキンパウゲも山草中珍らしきものなり、クモマキンパウゲに比すれば形態大にして高さ三四寸鮮麗なる金葩綠晶山草中見るべきもの、一なり、クモマキンパウゲに比して大なりと雖も、ミヤマキンパウゲ、シナノキンバイサウ等の如く冗長ならず、余は丁寧に數株を採集し、下界に移植して朝夕の眺に供せんとせり。此山に來りて常に面白く感ずるは、彼のクモマグサなりとす。これ活着頗る困難なる種類にして、白馬に於ては未だ見出す能はず、鐘ヶ岳に來るや、地域此山に入ると思はるゝと同時に、此草の多數に生ずるを見る、此現象を精査せば、本種の栽培に

就て發明するところあらん。
 採集をなしたつ、頂上附近に達す時に午後一時半。中食をなす附近の
 地勢は既に第一回登山記に記せり。此所より尾根を傳ひて杓子に達
 し、其の裏面を経て白馬に歸らんとす。杓子岳の裏面に來れば破碎せ
 る火山岩(主)に玢岩の岩片石礫急峻なる斜面一帯に壞崩せるを見る。
 注視すれば中腹に藥草採りの通過せし跡あり乃ち此路を進まんとす。
 然れども他の人々は容易に其の足跡を認むる能はずして爰に路ある
 を信ぜず前途を危ぶむ。
 壞崩せる火山岩の磊々たる間に人跡を認め溪流の中に行人の跡を尋
 ね、一草の折れたる一葉の落ちたるにも採集家の通過を識別するの眼
 識は、登山に經驗を積みたるものにあらざれば能はざるところなり。
 四近の谷底山隈漸く白雲多く風に乗じて峰に上る。杓子岳の裏面を

通過し了らんとせし頃濃霧四方をこめて天地白盡立壁の小舎の上
 と覺ゆるところにて方向を失し、如何ともすべからず。
 登山者の恐るべきもの種々ありと雖も濃霧の襲來は其の一なり。既
 に八千尺内外の高所にありては全く喬木を見ることなく、多くの灌木
 草本のみ故に快晴にして展望自由なるときは、何れの地點に行かんと
 するも深谷斷崖等の之れを遮るものあらざる以上は、意の欲する儘な
 るが故に殆んど案内者等の必要を認めずと雖も、一旦濃霧の爲めに蔽
 はるゝときは、樹木等の目標となすべきものなきのみならず、一帯に山
 骨現はにして壞崩せし石礫の磊々たるところ多ければ、路ありと雖も
 殆んど人の足跡を認むること難く、自己の位置明かならざるに至れば、
 磁石あるも殆んど用をなさず、此時にあたりては唯熟練なる案内人の
 嚮導に依頼するの外なし。而して濃霧に遭ふときは、一行の者全く一

團となり、相離れ相失すること勿れ、登山に経験少なきものは斯の如きときは、多くは恐怖狼狽しきりに路を見出さんことを求め、右に左に奔走し、遂には相失するに至り、不慮の災に罹ることあり。曾て八ヶ岳にありて大學生の一行が、非常の困苦に陥りしが如き、全くこれなり。故に吾等は、不知案内の地にありて、濃霧の襲來に遇ふときは、全躰忽ち一團となり、濫りに歩を遷さずして、原位置を保ち、徐ろに霧の晴るゝを待つか、若し晴れざるときは、到處に露宿するを得るの準備を有せり。後章第三回日本アルプス横断の際、二名にて八名の入夫を率ゐしが如き、全くこれが爲めなり。周到の注意と相當の準備とあらば、如何に無人の境を跋涉するも恐るゝことなく憂ふることなし。

今余等は立壁の小舎の上方にて濃霧に苦められ、如何にすべきかと思案せるに、幸ひにも霧中にありてしきりに呼ぶものあり、即ち其の聲を

尋ねて漸く近づけば、小舎に残し置きし入夫が濃霧四近をこむるを見て、吾等を案じ、此附近まで迎ひの爲めに來り居りしなり、依て相携へて小舎に歸りし時、午後五時。

之より切りに採集品の整理をなす、鍬ヶ岳の裏面に於て採集せしタカチキンパウゲの珍種他種と混同せんことを恐れ、一束として室内の石罅に挟み置きしが、其の儘下山の際、収むることを忘れ、四ツ屋の宿所に至りて後始めて想ひ出したれども、遂に及ばず、嗚呼過ぎたるは猶ほ及ばざるが如し。

午後より全山を蔽ひし濃霧は益々濃密、風さへ少しく吹き出てたれば、一步も石室内を出でず、盛に焚火をなして雑談に時を移し、九時前后より一人眠り、二人眠り、十時半皆華胥に遊ぶ。

翌午前一時半頃にもありけん、入夫の一人けたましき叫聲を出だせ

しに驚惶むれば石室の内白煙蒙蒙々異臭鼻を衝く火の粉四邊に散亂し、毛布と云はず外套と云はず一面の火となれり。衆周章狼狽或は室外に躍り出づるあり或は雙手にて火を消すあり或は狼狽の餘り何の爲すなく茫然たるあり全山寂として草木も眠る此夜半意外なる活劇は演ぜられぬ。之れ夜半爐中に投ぜられし槽の漸々燃えて人夫幅下某の衣服に移りしかば彼れは其の熱さに驚き周章の餘り石室内を狂ひ廻はりしかば此滑稽劇は演出せられしなり左程の大火傷者も出さずして事なく濟みしかば再び寐に就きぬ時に午前二時半。翌朝に至るも雲霧散せず余は湧泉に口嗽ぎて石室に歸らんとせしに室外にて人夫喧騒を極む何事ならんと近づき見しに今石室附近にて石を投げ雷鳥の雄を捕獲せしなり即ち其の肉を煮て朝食に供す。午前六時半人夫をして先づ下山の用意をなさしめ七時一同下山の途

に着く。八時半葱平下の雪上に來る。大残雪は其の斜面頗る急峻なるを以て下降するは稍困難を感ず因て附近にてミヤマハンノキの枝を切り一束となし吾等は荷を抱きて其の上に座し一端に綱を付け人夫をして此輕便繩を牽かしむるに其の走ること蹻捷輕迅二十餘町の大雪溪白雲迷ふ谷底目懸けて轟然として降る快駛電の如く飛鳥走獸をして羨殺せしむ普通二時間内外を費す雪溪二十分内外にして白馬尻に達す。白馬尻に來りしとき雲霧全く散じ快晴前日の如し。悠々喬木帯中に採集を試み午後三時半無事四ツ屋に歸着す。吾等登山の日より天候俄然一變して登山中一滴の雨にも遭はず近來無比の快晴巖に登山を阻みし人々又顔色なし豈快心の事實ならずや。翌朝四ツ屋を發し大町池田を経て明科驛より汽車にて歸る。



日本アルプス 白馬山

日本アルプスの雪
及び白馬嶽氷河

烏嶺

北越は之れ深雪の地。日本アルプスの峻嶺幽谷三伏の候猶ほ萬年の雪ありとせば必ずや日本海に面せる方面に積雪特に深かるべしとは一般に想像せらるゝところならんが今日本アルプスを踏破し其の實際を観察して此想像は全く事實に反せるを知る。日本アルプスの高山皆日本海に面せる方面には積雪を見ること少なく若し之れありとするも其の量多からず却て信州に面せる方面に峰と云はず谷と云はず低窪の地時としては巾數百間長さ數十町に亘たれる厚層の大残雪を見る。故に日本アルプスの連嶺日本海方面より見るときは雪少なさを以て崇高偉大の觀に乏し。然るに信州方面より

り眺望するときは、白雪皚々谷を埋め、峰頭高く雲中に聳え、壯巖の態又比すべきものなし。

之れを白馬の連峰に見よ。

鉢ヶ岳、鑛山附近の大残雪、白馬尻川上の大雪、溪、鎗ヶ岳、杓子ヶ岳、前面の大残雪、皆人の偉とするところ。之れを其の裏面に比せんか、鎗ヶ岳の

背後に残雪なきにあらず、池ノ平附近に雪溪ありと雖も、共に日を同じ

うして語るべからず。

又之れを針木峠に見よ。

信州に面せる籠川の上流には登攀實に二時間餘を費す大雪溪あり。

然るに越中に面せる川田の谷の方面には、夏草生ひ茂りて又一片の氷雪を見ず。

燕岳、屏風岳、大天井等に見るも、信州方面の谷には、皆永世不滅の雪あれ

ども高瀬川梓川に向へる溪谷殆んど一の白點を認めず。鏈ヶ岳の如きも信州に面せる高瀬川の方面には大残雪の中腹にかゝれるを見れども飛彈方面には殆んど之れなし。笠ヶ岳にありても鎗ヶ岳より望めば残雪多く立山より之れを見れば殆んど雪なし。

立山に於ては立山主峰劔ヶ嶽等日本海方面雪少なきにあらざるも之れを雄山大汝前面の急峻壯大なる大残雪に比すべくもあらず。

日本アルプスの日本海に面せる方面積雪多き筈なるに残雪少なく日本海上より来る風雪を遮るの連障ある東南却て千古の雪深きはそも何の故ぞ余をして今其の理由を説明せしめよ。

冬季朔北の烈風雪を巻いて日本アルプスの連障に衝突するや風之れに激し驟然として雪と共に其の裏面を疾驅し一旦連障を越ゆるとき

は連障の前面は風力弱きが故に雪は自己の重量の爲めに却て此所に降下堆積すべし之れ信州方面に積雪多き所以の一なり。又信州方面の斜面は午前の陽光を受け日本海方面の斜面は午後の烈光を受く故に融雪の量日本海方面に多し之れ信州方面に残雪多き所以の二なり。猶ほ精査せば幾多の理由あるべしと雖も以上の二大原因は余が獨創の見當らずと雖も遠からざるべし。

高山植物の分布は雪と至大なる關係を有す。之れ同一日本アルプス山脈なれども信州方面に其の名噴々たる所以なり。

而して此等の残雪は雪と呼べども下界の雪の如くならず全く氷結して堅岩の如く鐵鎚を以てするにあらざれば碎く能はず所謂フィレンアイスと稱すべきものなり。これ等堅氷の表面は夏日暖風の爲め多少融解し日中は數寸のところ手にて掬すべし且つ直徑一尺内外より三

四尺位の皿の如き窪み表面全体に連続せり。紀行文中に激澁の氷結せしが如しと形容せしは、或は其の萬一を想像せしむるに足らんか。日中融解せし表面は夜間再び凍結するものゝ如し、彼の立山室堂にては附近に雪解の水を引きて飲料となせり、然るに此水午前十一時頃より漸く流れ來り、午後八時を過ぐれば一滴も來らず、又早朝三時雪を踏んで頂上に上りしに晝間軟かき表面全く岩の如し。他の高山にありても同様なるべけれども、余は未だ夜中雪上を跋涉せし事なきを以て、其の事實を例證すること能はず。堅岩の如きフイルンアイスが急斜面の谷に於て龜裂せるを見るときは、裂口は利刀を以て裂きしが如く、且つ破口より氷層を見るに淡青色を含める有様、恐ろしき中にも一種の美觀あり。厚き残雪の氷層も下方谷底に接するところは屢々融解せるところあり。

りて、所謂雪の隧道をなし、溪流、鞍帯として其の下を流れ、一奇觀を呈せり。

山崎理學士は、白馬嶽に於てカールに似たる地勢と、岩面に擦痕あるを見て、氷河の遺趾と断定せられ、之れに關する有益なる學說を發表せられたり。之れに對して未だ學者の具體的批評を加へたるものなし。余は四回の登山を試み、氷河の遺趾に關しては目下調査中なるを以て左に山崎理學士が東京地質學會に於て述べられたる一節を録せんとす。讀者は之れによりて大に得るところあらん。

地質學雜誌第九卷第百九號、全百十號に「氷河果して本邦に存在せざりしか」と云ふ標題にて登載せられたる後半なり。

信濃の西北、越中越後の界に當りて高く聳へて居る一つの山嶽があつて、地質調査所の地圖には大蓮華山と云ふ一つの火山になつて居る、私は此邊の火山を見やうと思つて行たのであります。が此邊の地圖に大蓮華山と記してあり

ます所は此邊では大蓮華とは申しませぬ乗鞍と稱して居る、然し之よりズツト南の方に更に有名なる所謂乗鞍岳がありますから夫と混じませぬ爲に之は蓮華乗鞍と呼び置うと思ひます、私は此邊の山を跋渉して火山の構造を究めて行きましたたが其時に始めて信濃越中の界なる白馬嶽なる高山に於て氷河の痕跡があつたのを發見したのであります、私は始め未だ斯う云ふ判然たる證據を見ませぬ前に蓮華温泉海拔一千六百五十米からして少し高い山に上つて越中の境にある高山を見渡しました時に其山の形が如何にも面白く思はれました、夫は彼の邊の山にカールと申します所の地形を作つて居る所があつた、カールと云ふのはどう云ふ地形であるかと申しますと高峰の頂上に丁度剝つた様に半圓形をなして居る一の絶壁を作つて居る此絶壁が其儘麓まで急斜して居るのではなく、中腹に至つて止て爰に平坦な地がある夫から又再びズツト傾斜が急になつて居る、斯の如き地形の所々に見えたのである殊に雪倉と云ふ山の邊などは蓮華温泉の直ぐ西の方に當る所であり、ます其處に斯う云ふ地形が著るしくよく見えて居ります、夫から氣を付けて参りますると尙南の方に行くに従つてさう云ふ現象が所々に見え、ちよつと見ますると噴火口が半分缺けて残つて居るやうな地形であります、是は

各國の高い山に随分あることであり、ます又低い所に於ても若し非常に雪が降つたり氷が積つて居つたと云ふ所には斯う云ふ現象があります、アルプスなどには無論此形迹は澤山ありますが彼處の窓に掲げてあります寫眞が即ち中央アルプスに於けるカールを現はしたのであります、此カールはどうして出来るのかと申しますと雪が澤山其處に積つて居つて従て其爲に生じた氷の浸蝕作用の爲に出来たのであります、所が今日では此地方に左程多くの雪が積り又之が氷河となつて居らぬのに何故澤山所々にカールが見えるのか、定めて元澤山な雪が積つて居つたのであらふ氷が其處に堅まつて居つたものであらふと云ふことを想像したのであります、夫から峯傳いに蓮華乗鞍から白馬嶽の方へ行きます中に大日向嶽の峰に近く如何にもモレーン(漂石)であらふかと思ふ土地を見たのであります、夫は先程御目に懸けましたアルプスの寫眞と同じやうに山の崖の所に平たい所があつて其處に丁度堤防のやうに石の碎けたものが重なつて長く横はつて居る所がある、又其南方の山腹で丁度北股の澤に臨んで居る方面に端堆石即ち特にスチルンモレーンと稱すべきものと思はれるものゝ形迹が見える、山嶺の一部で谷を見下すに都合のよい所に立つて彼の南腹を見渡しますと

山の傾斜の稍緩なる所に宛も懸掛か首輪を掛けたように新月形の堤防状を
 なしたるものが二段に重んで連なつて居る、モウ一つ夫に似たものがありま
 す、夫はハツキリ處は判らないが先づ爰に斯くの如きものが三段あると見て
 好い之は疑ひなく嘗て此處に氷河が流れ懸つて居て其末端にスチルンモレ
 インを造り其後氣温上昇の爲め氷河は高處に退却して其端に第二のスチル
 ンモレインを造り更に再び退却して第三の端堆石を残すに至つたものであ
 らうと思はれるのである此等の地形を見て愈よ此あたりには嘗て氷河があ
 ったであらふと云ふ念を強めたのであります
 夫から尙此峰をズット仰ひまして白馬嶽と云ふ所へ行つて野宿をした此白
 馬が岳は信濃、越後、越中此三國の境にある高い山で地質調査所の豫察圖に依
 て見ると高さが三千四十一メートルと記されてある此處に泊つて翌日東の
 方へ下りて來やうとした此處に北股の澤と云ふて姫川の支流松川の水源を
 造つてる非常に深い大きい谷がある又南の方に之に並んで南股の澤と云ふ
 のがある其二つの谷が末て出合つて松川となり東方に注いで居る夫が姫川
 に落ちて遂に日本海へ注ぐやうになつて居る私は此北股の澤を下らふと思
 ひまして僅かに降りて漸く二千九百メートル位の所へ來たかと思ふ頃に其

處に未だ雪の残つて居る所があつた其兩脇は岩壁で如何にもアルプス邊り
 で氷河の流れ懸つて居るやうな地形でありますからして若しや此邊に嘗て
 氷河でも懸ては居なからうかと思ひまして餘程氣を付けて居りましたので
 あります先づ例の擦痕の付いた所はないか或は此邊に瑕の付いた漂石ても
 標がつて居りはしないかと氣を配つて居りました所が果して其今日雪のあ
 ります所の左りの方の崖に盛に擦痕が付いて居たのである其崖の有様は此
 寫眞で見る通りに雪のある所の左りの方にズツと岩石の露出して居るあた
 りである其岩石はクラソツケ砂岩質の粘板岩である普通高山の地方に於て
 は風水の作用甚だしき爲め露出の粘板岩などは角稜峨々たるを常とすれど
 此處に在てはルンドヘツカーをなして露出せる表面は一面に丸く滑べつこ
 くなつて居て其上に先刻御覽に入れたテンマークの石灰岩と同じやうに一
 面に擦り缺いた所の痕がズツと付いて居る此處にあります標本は白馬が岳
 から取て參りました大きな岩の一部分でありますちよつと見ると断層に沿
 ふて生じた滑面のようであるが此等の滑面は通常平面をなして居るが此地
 の擦面は婉曲に風曲して居る又擦痕其物も谷の方向に走て居る此標本は丸
 い饅頭形のやうになつて居る岳の一部分を取て來たのであります此處に透

にデンマークから取て来た石灰岩の一部分が比較に並べてありますから對照して御覽を願ひ度い其擦痕の有様が全く全一であることが知れるてありましやう私は實に始めて本邦に於て其様に立派に氷の侵蝕作用で出来た痕跡を見たのであります今申上げた處は氷の下になつた所の部分でありまするがさうでなしに或は脇の壁の所でもあつたらふかと思はれまする所は一面に打跌いた段が付いて居りました之は氷河の中へ挟まつた石がボツ／＼當つて夫が爲めに氷河流走の方向に向つて此處に痕が一面に付いて居る其痕の所を實は取つて來やうと思ひましたのが平たい面を取ることが出来ませなかつたので今日其標本を此處にお目に懸けることは出来ませぬは残念である

私は此等の現象を目撃致しまして始めて日本にも嘗て氷河が流れたことがあつたと云ふことを確めました此今申しました所は二千九百メートルの所であつた其際此地方の澤を下りましてまだ百米も降たかと思ふ頃に又右手に當つて非常に大きな岩が出て居る夫にも今お目に掛けましたのと同じやうに一面に擦痕が付いて居る是からモウ少し下つて行きますると谷の左の方に側堆石と思はれる物があつて凡二百メートルも續いて居る即ち土手の

やうになつたものが谷の中に一段と現はれて居る唯之を作て居る片が粘板岩でホロ／＼段はれて居りますからして其擦痕のやうなものは見當りませぬけれども地形から見るとモレインであつたらふと思はれます夫から猶下りますると谷越には非常に澤山の雪が残つて居ります上の方から下つたものもありませうし太陽の光線が透せぬ爲めに融け残つたものもありませうし其有様は宛もアルプスあたりの氷河と少しも違はない乍併雪の構造を見ますにどうも氷河とは思はれない其雪は矢張一粒々々の雪粒から出来て即ちフホルンである其粒々全く相癒合して一塊の氷となるまでには未だ立至て居らぬ其雪の層は處によると中々厚くて十乃至十五米即ち五七間の厚さに達して居る處もあることによると毎年々々の雪も重なつて居りませう其間には随分所々に割目があつて其割れ目を見ると眞白な部分もありまするし幾分か半透明の物もある／＼の層を爲して居る此層を爲す工合は丁度氷河に於て見るのと同じやうである然し眞の氷河に於て見る時のやうに之が一塊の氷であつて其層々が青、淡青等の帶狀に排列されて居るやうな構造は少しも見えない矢張普通の白い雪である堅い所を取つて見ても丸い粒が皆雪の重なつたものであるを示すに過ぎない此雪が随分廣い面積を占

めて居る私共は上の端から下の端迄殆ど三キロメートルの長さは雪の上をズット渡つて来たのであります其頃は八月の末の方でありましたから此雪は無論此夏には融け果てず再び此冬の雪を其上に戴くことでありましたよう此雪の附近の岩石も餘程注意して見ましたが上の方で見たやうな痕はつい見當りませんでした夫から此北股の澤をズット下りましてモウ一度野宿しまして南股の澤の合點まで参りました

此南股の澤と申しますのは前に申しました白馬が嶽の南の方にある高峰薬師嶽と鑷ヶ嶽の間から来る大きな谷で末は北股の澤と合して居る私は北股の澤を出て夫から再び南股の澤の方へズット上つて行て見た地質圖に依りますると彼の遊華乗鞍からして南の方は一體に富士岩が出て居る様に着色してあるしかし此邊を捜して見た所が富士岩にしてある處は皆蛇紋岩で要するに此地方には非常に大きな蛇紋岩の露出があるのである南北の澤の合點から凡四千米足らずも上の方へ溯つて行た所が南の方から落ちて来る所の一つの澤があつた其處は丁度山が崩れて居りまして山上から下へ蛇紋岩の塊片が澤山落ちて来て居る其石を見ますのに今新らしく山が破壊し崩れて来た缺片とは思はれない其石片は角稜のあるものではない其角は餘程甚

しく擦り減らされて居て丸くなつて居る夫で餘程おかしと思ひましたが其邊を尙捜して見ますと上から落ちて来る爲めに現はれた四斗俵程の石が轉がつて居る其面を見ると白馬嶽で見たのと同じやうに並行して居る痕を以て一面に傷けられて居る夫のみならず脇の方に不規則な擦痕が一面に付いて居つた面白いから取つて来やうと思ひましたが運搬が不便で其意を果しませなんだ

尙夫に力を得て其邊を捜しますと果して數多くの此種の石を見出しまた即ち此等の石はモレインであつて山の上に横はつて居たものが山崩の爲に轉がて来たのであると云ふことを知つた此處に其處から取て来ました一塊がある即ち蛇紋岩の断片であります少し傾けて影にして御覽になりますると能く分りますが一面に不規則な擦痕が付いて居る即ち氷河の中に挟まつて石と石と相擦擦して出来た所の痕であると信ぜられます然し何と申しても蛇紋岩のやうな石でありますからして石灰岩のやうな緻密な岩石について居る細く明かな痕は少ないが兎に角其痕は判然と見ることが出来るのであります此南股の澤で此漂石のあります所は海面上どの位の高さであるかと云ふと千七百メートル位の所であつた其邊の所にモレインが流れて

来て居つたのであります
 上に申じました北股南股の二川は松川となり遂に姫川の方へ注ぐのであり
 す其松川から押出して來ました砂利は山を出ると全時に山麓の地方に堆
 積して段丘を造て居る地質圖には其段丘の部分は洪積層となつて居る此
 段丘であるがアルプスの麓あたりは此段丘の研究が非常に重いことになつ
 て居る結局其段丘の中に漂石を含んで居るか居らぬかと云ふことを見て其
 氷河の作用で出來たものか或は氷河間歇時に出來たものかと云ふことが分
 り従つて氷河時代の計算をするに餘程都合能く出來て居りますそこで此松
 川の段丘にも或は之と類似した層でもありはしまひかと思つて搜して見ま
 したが少しも此中に漂石と思はれるものはなかつたのであります思ふに此
 信州の北の方越中の境に沿うてあつた所の氷河はアルプスから中央ヨロ
 ツパに流れた氷河のやうな大きな氷原を造つて居たものではなくして矢張
 今日アルプスに掛け居る氷河の如くにクヘンダケレツチアとかタールグ
 レツチアとか云ふ種類のものを作つたものではないかと思ふのであります
 然し詳しく搜して居る中に所謂洪積層と稱する中から實際漂石でも出るこ
 とがありますれば日本の第四紀層につきて餘程有力な變化を起すことがあ

りはしないかと思ひます今日日本の第四紀層殊に其洪積層につきましても
 外國のやうにチャンとハツキリした證據はないのであります唯漠然と地形
 上より區別してある様であつて極不規則なものになつて居るらしい若し氷
 河遺跡に關する研究が積まれて他の地層との關係がハツキリ分つて參りま
 すれば餘程面白い結果が得らるゝことと思ひます私は白馬嶽より尙四方に
 時つて居る所の越中立山などを見ますと立山の東の方黒部川の方に向つ
 た方にもカール狀の地形のズツと横はつて居るのを見ました此邊も昔は盛
 に氷河があつたものではないかと云ふ想像を起したのであります然し時
 許しませぬこととてありますし今度は別に氷河の研究の爲に行つたのでは
 ありませんからソコ等のことは別に研究致しませぬが必ず斯う云ふのが他
 所にもあらふと信ずるのであります自然彼の邊を旅行なさるゝ方がありま
 すれば其邊に御注意をして戴きたいと思ひます(下略)

白馬嶽附近植物目錄

我が本州の地に於て植物分布の複雑なる其の種類の種類多なる恐らく

日本アルプス連峰に及ぶところながら、而して其の各峰は多く人跡
 到らざるところ彼の有名なる植物學大家露人マキシモウッチ氏の如
 きも本邦各地方を跋渉せしにもかゝらず其の足跡の及びしところ
 は吾人が第二位の植物産地と認むる地方に過ず特に高山植物の寶庫
 とも稱すべき地方の研究は全く吾人の爲めに殘されたり深く先輩に
 對して感謝せざるべからざる事實とす白馬嶽の如きは其の價値につ
 きては世間既に定評あり今前後四回の登山に於て採集せし植物目錄
 を擧ぐ素より杜撰を免がれざれば主要なる種類にして脱漏せしもあ
 るべし價値なきものゝ加へられたるもあるべし大家の考察に資すべ
 きにあらず聊か登山者の參考に供せんのみ而して喬木帯以下の植物
 に就ては特に其の調査の不十分なることを自白せざるべからず所謂
 高山植物に就て意を用ひしに過ぎす余は第一回の登山に於て二新種

を發見し又第四回の登山の際二新種(種名未定)を得たり新産地の發見
 は多々有之と雖も産地の詳細を記述するの違なきを遺憾とす

水龍骨科

- おしやごじてんた りようめんした いはかねせんまい
- こたにわたり わうれんした やまそてつ
- しのぶかぐま しゆもんした いはてんた
- みやまいたちした おくやまわらび ちやせんした
- ならいした みやまうらほし さした
- おほほしよりま さほみやまいぬわらび ひろはのいぬわらび
- ひめした なんといた うさぎした

瓶爾小草科

- はなやすり ひめはなわらび なつのはなわらび

石松科

ひかげのかつら
まんねんすぎ

たかねひかげのかつら

すぎかつら

松柏科

もみ

うらじろもみ

はひまつ

からまつ

つが

こめつが

ねずみさし

いちる

しらびそ

禾本科

ねまがりだけ

やまかもじごさ

かりやす

やまあは

みやまあはがり

こめすゝき

おほがぶらすゝき

みやまのがりやす

いはのがりやす

みやまこめすゝき

たかねかうぼう

うしのけごさ

莎草

おほうしのけごさ

みやまぬかほ

あぶらがや

そごのあぶらがや

あいほさう

あぶらしほ

はりすぎ

かわざすぎ

ひめかんすぎ

みかつきごさ

いとぎんすぎ

しろうますぎ

しやうじやうすぎ

みやまたぬきらん

みやまころすぎ

みやますぎ

燈心草科

みやまる

いとる

みやまころほし

ころほしさう

かうがいはきせう

たかねる

みやますゝめのひそ

百合科

蘭科

ひめいばせうぢ	くるまゆり	みつぎぼうし
ちしませませう	こおにゆり	たうぎぼうし
ちしまあまな	しろうまあなつき	うばゆり
くろゆり	つほめおもと	つこほねさう
くるまほつこほね	しゆろさう	まぬがささう
まらつるさう	あさやぎさう	ちやほせませう
たまがはほとんぎす	こほいけいさう	たけしまらん
ますげ		
ちどりさう	いよぼうちどり	ありどうしらん
おほやまおささう	しろうまちどり	さいはいらん
つれおささう	のびねちどり	みやまふたほらん

楊柳科

はくさんちどり	こいささうらん	まぎちどり
あさちどり		

樺木科

いはやなぎ	ちしまやなぎ
-------	--------

穀斗科

たけかんは	おほはしらかんは	はんのき
みやまはんのき	つのはしほみ	やまはんのき

蓼科

ぶなのき	おほなら	いぬおな
こなら		
うはみさう	いらんさ	むかどうらん

馬兜鈴科

みやまいらんさ

かてんさう

こほのかんあふひ

うすほさいしん

藜科

むかごとのりを

うらじろたて

おほいたどり

みやまたにそほ

じんそうすいほ

石竹科

しこたんばこぶ

いはつめくさ

みやまつめくさ

しなのなてしこ

こほのつめくさ
たかねなてしこ

みやまみゝなごさ

木蘭科

こがし

薬蕪科

かつら

毛茛科

もみじからまつ

しきんからまつ

ひめかぢまつ

しらねあふひ

れいじんさう

おほれいじんさう

さらしなしようま

るいそうしようま

やまとりかぶと

やまおだまき

みやまおだまき

ひめいちげさう

ほたんづる

くさほたん

みやまはんせうづる

たかねきんぼうげ

みやまきんぼうげ

くもまきんぼうげ

しなのきんばい

つくもくさ

はくさいいちげ

ひめからまつ

みつばわうれん

小蘗科

いかりさう

とがくししよらま

さんかえう

罌粟科

こまゝさ

まげまん

つるまげまん

十字花科

みやまはたぎほ

ふじはたぎほ

えぞはたぎほ

いはゝたぎほ

みやまなづな

みやましろいぬなづな

なんぶいぬなづな

みやまがらし

みやまたねつけはな

しろうまなづな

おほはたねつけはな

茅薺菜科

まうせんごけ

景天科

つめれんげ

まりんさう

みやまゝねんごさ

虎耳草科

のりうつぎ

うめはちさう

しらひびさう

ひめうめはちさう

たいもんじさう

くろくもさう

ふきゆきのした

やぶるまさう

しこたんさう

くもまぐさ

むかごゆきのした

あらしごさ

こまがたけすぶり

づたやくし

薔薇科

なつゆきさう

しめつけさう

みやまだいこんさう

いはきんはい

ひめゝびらさう

うはみじこさう

みやまなゝかまど

なんきんなゝかまど

せんせし

はごろもぐさ

ちやうのすけさう

しんせんのくびらさう

のうごいさう

ちんぐるま

みやまきんはい

うらじろきんはい
たかねほら
べにほないちご
たてやまきんはい
こがねいさご
からいどさう

豆科

いはわうぎ
おやまのそんどう
しろうまわうぎ
もめんづる
たいつりわうぎ

猪牛兒科

しろうまふうろ
あかぬまふうろ

酢漿草科

みやまかたほみ

芸香科

みやましきみ

大戟科

ゆづりは

岩高蘭科

がんかうらん

毒空木科

どくうつぎ

黄楊科

ふつまさう

冬青科

つるつげ

槭樹科

はなかへて
うりはたかへて
からまきかへて
おがらはな
こはうちはかへて
みねかへて

七葉樹科

とちのき

鳳仙花科

きつりふぬ

獼猴桃科

またゝび

しらこぢづる

金糸桃科

おとぎりさう

みやまおとぎりさう

堇菜科

すみれさいしん

みやますみれ

きはなのこまのつめ

たかねすみれ

おほほきすみれ

柳葉菜科

いはあかほな

みやまたにたて

やなぎらん

五加科

みやまうこぎ

はりびき

繖形科

はくさんさいこ

はくさんほうぶう

かはせんこ

はなうど

のたけ

しらねにんじん

みやまうるみやう

山菜萁科

ごせんたちほな

みづき

鹿蹄草科

べにいちやくさう

しやくじやくさう

ぎんりようさう

石南科

みねずわう

いはなし

きほなのしやうなげ

むらさきあじさい

しらたまのき

ぢむかて

つがさくら

しやうなげ

こめつとぎ

くろまゆのき

こけもゝ

いはひけ

あさのつがさくら

しろほなしやうなげ

つりがねつとぎ

あかもの

うらしまつとぎ

岩梅科

いはらめ

こいはかみ

いはかみ

櫻草科

おほなつらなつ

ゆきわりさう

なんきんこぎら

つまつりさう

龍膽科

はないかり

みやまりんだう

たてやまりんだう

たうやくりんだう

おやまりんだう

うしませんぶり

さのへりんだう

つるりんだう

みやまあけほのさう

紫草科

みやまむらさき

いはむらさき

唇形科

いぶきじやかうさう

みそがはさう

じやかうさう

かめほひきおとし

たてやまうつほごさ

らせうもんかつら

玄蔘科

きはなのしほがま

よつほしほがま

みやましほがま

こごめごさ

ゆきわりしほがま

みやまこごめごさ